

〈琉球新史料翻訳・論考〉

## 清冊封琉球散逸史料『(冊封)琉球国記略』(『海国記』か)

—沈復『浮生六記』<sup>1</sup>第五記「中山記歴」の元抄本か<sup>2</sup>(日本語訳付)—

An Unknown Historical Material Canonized Ryukyu in the Qing Dynasty: "Hai Guo Ji"  
—Shen Fu's "Six Chapters of a Floating Life", the fifth "Transcript of Zhongshan Ji 歴" (日本語訳)—

著者：(清)沈復撰 錢泳抄 翻訳・論考：劉劉

Meta-author:Tinnfuku(Sin) Translator & Discussion:Liu Gou

### 要旨

清光緒四年(1878年)に刊行した時点で、すでに散逸していた巻五が、200年後の現在、再び姿を現した。ある古本屋が南京城内の大道露天で乾隆・道光間の文化人錢泳(号梅溪)の手書きの『記事珠』を発見した。これが「浮生六記」の巻五に当たる「海国記」に相当するかどうか、まだ仮説になっているが、一応『(冊封)琉球国記略』に記録されている。一時に、200年前の紅衣人(傾城、遊女、ジュリ)も浮上、130年前の琉球王国に関する資料が南京のフリーマーケットに現れた。『浮生六記—浮生夢のごとし』の巻五を写したものがこのほど発見された(「海国記」・「中山記歴」佚文の再発見)。浮生六記(和訳:浮き世のさが)は散逸したといわれるが、132年後、再び浮上してきた。清の光緒四年に刊行されてから、131年後に再び姿を表した佚文などのように、メディアが沸いた。

琉球時代の認識に新たな資料が加わることは間違いない。沈復の『浮生六記』巻五の真偽、200年後の浮上は、琉球中山国に関連する内容を含んでいることを確認したものである。また、以上のように、当時の琉球王国社会の各側面の理解や参考のために新しく、欠かせない資料になる。

キーワード：『琉球国記略』・『海国記』(中山記歴)・沈復・『浮生六記』・錢泳

Book Seal Ryukyu New Historical Materials, Kaikokuki, Shen Fu, Ukisei Rokuki, Nakayama Kireki

- 『浮生六記』、清嘉慶・道光年間、蘇州の落胆文人である沈復の撰。六記を名にしたが、活字にされた際光緒三年(1878)、すでに後二記は失した。中国の学界で「小紅樓」と言われ、それに関する探究や研究が多くの人々の関心を誘発して、「浮学」という分野は学術誌のみではなく、民間にもインターネット上にも展開されている。特に、琉球の史実に関連する第五記をめぐって史料の真偽論説が多い。人物の言動や内心の描写は未曾有のことで中国の文史学の大家である魯迅、林語堂、陳寅恪、俞平伯なども絶賛。中国語以外、16か国以上の文字に翻訳出版され、日本語訳は昭和十三年(1938)。今回新たに発見された史料は、沈復の同時代の抄本史料で、沈復本人の『浮生六記』の失した巻五かどうか、最大の焦点になる
- それは、今まで世間に流布されている沈復の『浮生六記』の第五記と照らして比べると、やはり違う。それは、偽作というそのものは、最初の年代も間違えている。沈復と同行した齋鯤と費錫章の琉球出使は嘉慶十三年だったが、偽書の方は、嘉慶四年と記載している。つまり、嘉慶四年(1799)から嘉慶五年(1800)の間、正史趙文楷、副使李鼎元の琉球冊封と混同している。「浮生六記」は最初に原稿・抄本として世間に回覧され、楊引傳氏は蘇州の露天で最初の4巻を購入した。その残本は清光緒四年(1878年)に活字で上海の申報社に務める妹の旦那に頼んで出版された。そして、『独悟庵叢鈔』に収録された。これは、この本の最初の刻本である。

## 一、本史料の散逸や再発見をめぐって

200年あまり前の琉球社会を再現する資料が、南京のフリーマーケットに2008年に出現したことをめぐって、様々な議論を呼んできた。筆者は十年前<sup>3</sup>、地方新聞にこの資料をめぐるとの経緯について紹介文を投稿したが、十数年を経て、新しい情報を追加して翻訳・論考の文章をまとめてみた。

### 1.

当時の投稿で、友人の研究者の話によれば、昨年夏頃、中国南京で琉球王国時代の新資料が発見されたようだ。調べてみると、それは、清代中期の江南の才子沈復の『浮生六記』（訳名『浮きよのさが』沈復作、佐藤春夫・松枝茂夫訳、岩波書店、東京1938年9月）の失われた巻五『中山記歴』（別名：『海国記』）<sup>4</sup>であるか。ただし、巻五、巻六は散逸している。

清光緒四年（1878年）に刊行した時点で、すでになかったその巻五は、200年後の今、再び姿を現した。ある古本屋が南京城内の大道露天で乾隆・道光間の文化人銭泳の手書きの『記事珠』を発見した。その一部（約6200字）に、この浮生六記の巻五に相当する『海国記』が記録されている。問題点としては、本当にその巻五に相当する史料なのかどうか、または同時代のほかの人が残した資料なのかということである。

発見された資料は竹紙に記されており、折ったもの。半葉の高さは25センチ、幅は15.5センチ、半葉毎の行は12から14行、一行は29～36字、ページ数18ページ、字数は約6200字余り。そのほか『浮生六記』に関する筆記や目次紹介などの資料は10ページほどあり、ページ数合計は28ページである。

今回発見された資料により、200年前の琉球王府時代の社会の様子をより鮮明にすることができる。というのは、

①民間使者としての沈復が著した「海国記」と清の冊封使節によって書かれた公的な資料との対比。冊封使の従者の身分で琉球と一緒に旅をして、文字の記録を残したのは、実に沈復の「中山記歴」のみだそうである。比較的詳しく、生き生きとしたものである。内容もけっして一人の在職大臣が書いたものではなく、李鼎元の『使琉球記』と比較しても、官僚主義的な雰囲気がなく、儒家の道德観に束縛された概念がまったくない。一人の人間によって書かれた文章である。

②民俗文化学者の視野から琉球社会の観察。『浮生六記』は、清王朝時代の蘇州の官僚であった沈復が庶民の日常生活を慎ましく描いたものである。わずらわしい封建的な家族関係にがんじがらめにされながらも、どのような時代や環境であっても育まれる、市井の人々の誠実さや愛情に心打たれる読み物である。そんなエッセンスが、そこに散りばめられている。

このような、地味で簡潔ながら誠意ある文章が、時代や国境を越えて今読めるということ自体が、この世の救いと思われてならない。夫婦の情愛の理想的な形であると思う。だからこそ、こ

3 劉剛：「琉球王国時代の理解を深めるために必要な新資料」清代中期沈復『浮生六記』巻五「中山記歴」----2009年12月04日『琉球新報』。説明を加えたいのは、その後、2010年4月人民出版社『浮生六記』（本史料入り）再版した。2010年6月にて、陳毓璠教授（元中国社会科学院文学所所属、故人）が『文学遺産』（2010年6月号）に投稿し、「『琉球国記略』は沈復が書いたものではない」という論考を発表した。

4 コレクターから「海国記」に命名されたのは、鄭偉章（文献学）が銭泳の「登樓雜記」の抄本で「海国記」の内容の記述を発見し、彭令（古書商人）の所蔵するコレクションの《記事珠》の琉球関連が「登樓雜記」と同類に気づいたからだ。区別とは「登樓雜記」とどちらも銭泳によって書かれているが、「海国記」の原本は、銭泳によって手書きされたものであり、「登樓雜記」の原本は銭泳の息子である銭日祥の抄本であると疑われている。つまり彼の父の作品を整理し、それは銭日祥または彼の要求に応じてコピーライターによって複製、現本は中国国家図書館のレアブック部門に所蔵してある。

の本は中国以外でも、十数カ国語に訳されているのであろう。

また、今回の発見により、首里城の「中山」の門、「守礼」の門、そして「来龍」の記載などが明らかになった。「さらに3～4里ほど行くと、一つ高い鳥居型の門と出会い、その上に「中山」という二文字が大きく書かれている。また、百歩あるくと、もう一つ鳥居型の門が見えてくる。その上には、「守禮」と大きな文字が書いてある。道の中心部に一つ四角の石台を築いている。中に一束の蘇鉄が植えてある。「来龍」の意味であろう。」

また、ほかに国場の「松瑞物語」の伝説なども記載されている。

琉球に直接関連した資料は4枚、約1200字である。沈復は嘉慶十三年(1808年)、冊封使節団の正史の齊鯤、副使の費錫章に従って琉球を訪問し、その経験にもとづき『海国記』(修正後『中山記歴』と記すか?)を書き残した。銭泳が『記事珠』の「雑記」の中、『浮生六記』巻五に相当する部分を『冊封琉球国記略(海国記か)』という題を附して写し取った。その「雑記」の中の琉球に関する記述や資料は、次のようなものである。『(冊封)琉球国記略』でそのなか、例えば「冊封使節の琉球までの航海経過」「琉球国王の冊封式典前の王宮見物」「琉球国演劇」「琉球国妓女紅衣人」など四つの文章。そのほか、「琉球に到着した時の歓迎式典」、「琉球国王を冊封する過程」、「琉球国の歴史と地理状況」、「大臣の住所」、「琉球国内流通の貨幣」、「琉球国の刑罰、糧食、動物、酒類、民家、女性が集まる所、寺、冠服、交際儀礼、言語と文字」、「演劇項目」の「天縁奇」、「笠踊り」、「君爾」、「羯鼓舞」と「執心鐘入(淫女爲魔)」なども含まれている。また、琉球の紅衣人(芸妓)および紅衣館(妓楼)に関しては、彼女たちの衣服や髪の中の形、姿、装飾、服装、歌舞、生い立ちおよび日常生活、飲食などなど。紅衣館のたたずまい、家の中の飾りつけ、盆栽および深夜の営業状況などをかなり詳細に紹介している。

## 2.

### ③生き生きとした琉球社会の理解。

「中華人が紅衣館(案：つまり琉球国の妓楼)に来る時、誉められた紅衣人の価値がすぐ十倍ほどあがり、さらに気にいられて、長期契約ができると、必ず一つの銀の簪(かんざし、琉球語でジーファー)を彼女に上げ、つけられた側も誇りに思う。なぜかという、当時の民間社会では、簪はすべて骨や角で作られており、妓女たちは中華人からもらって髪につけることができる。そのデザインは蓮の花弁のように足の長いもの、一本の重さに5匁<sup>5</sup>ある。」

「紅衣人」という名前は初めて浮上する。風俗史や社会史の理解に役に立つ。

ちなみに琉球の赤い衣服人に対する清朝の態度と「政策」について、乾隆二十一年(西暦1756年)から、使節として赤い衣服人を追い払うことに命令を下し、使節人員として彼女たちとの付き合いを禁止する。周煌は乾隆二十一年(1756)琉球への冊封副使だった。この件について彼が『琉球国志略』の中で言及した。「張学礼の話で、当地、女子を嫁がせず、両親を離れ、外島の貿易客をもっぱら接待する。女性の親戚や兄弟、善悪を無視し、依然として見知らぬ客を親戚らしく付き合いや往来する。もちろん恥にならない。臣は初めてきた際、番妓の多いことを

5 匁、漢語の発音は、cuó と呼び、薊草類(アブラガヤ(水草の一種で、茎でむしろを編む)の植物;また、量詞、古代のある種の小まめな金銀を計量する単位、例え、「一万匁の銀子」。此処は、量詞としてその金の重さをはかること。

聞き、これは侏儷<sup>6</sup>（案：美人、綺麗な女性、つまり、掌中の珠の意や珍重な人、ここは、堂の前に並べる綺麗な女性）と謂うが、実は「傾城」<sup>7</sup>二文字の現地言葉の発音だ（案：今までの訳や注釈は、曖昧のままで不明だ）。しかも外島から更に相次いで到来している。すでに唐榮総理司に申し出をし、善意に追い払う対策を考慮し、華人を誘惑させるな。」（張學禮録：女子有不嫁人者，離父母自居，專接外島貿易之客，女之親戚兄弟，毋論貴賤，仍與外客序親，往來不以為恥。臣茲役甫至，風聞土妓甚眾，謂之侏儷，實則傾城二字之音也。外島且更繼至。因移書唐榮總理司，論其善為驅逐，毋令蠱我華人。）

④清代の書道の大家である錢泳を通して、当時の琉球社会を表した文章が直筆で写されたということは、文献的価値だけでなく、芸術的価値が高いことは言うまでもない。

⑤現在、公開されている資料は六枚の写真だけである。全体の公開は持ち主が買い手を待っているそうである。ある筋によると日本の大手出版社がそれを買い取って30年間のすべての言語への翻訳、出版を独占することを望んでいるらしい。概算統計によると、1980年頃、中国大陸で『浮生六記』が再版されてから2007年末まで、国内外で中国語の簡体字や繁体字版、そしてイギリス、フランス、ドイツ、ロシア、日本、デンマーク、スウェーデン、マレーシア語など、多種の言語に翻訳・出版され、すでにあわせて300万冊以上に達している。もし、この「消失」した同書の巻五『海国記』（又は同時代史料か）は順調に翻訳・出版されれば、琉球王国の史実をもっと広く世界の人々に知らしめることになるだろう。

今回の発見によって琉球時代の認識に新たな資料が加わることは間違いない<sup>8</sup>。沈復の『浮生六記』巻五かの200年後の発見は、琉球中山国に関連する内容を含んでいることを確認したものである。また、以上のように、当時の琉球王国社会の各側面の理解や参考のために新しく、欠かせない資料になる。

### 3.

2008年前後、中国大陸在住の彭令という古書商人より、国際電話を受けた。本文の話をして

- 
- 6 侏儷、常用外漢字で、もともとの意味は、蕃夷の言語の理解がたい、鳥の言語らしい（四庫より）。発音は中国語の傾城（qingcheng）と違い、疑問なことだ。よく原文の文脈でチェックをいれると、此処の意味、ジュリは、中国語「傾城」という二文字言葉の現地語の発音である。周煌『琉球国誌略』（原田禹雄の注釈）、『琉球の花街 辻と侏儷の物語』（浅香怜子、2014）などの参照、その解釈も信じ難い。つまり、侏は、琉球語で赤の意味、儷は、首里の御官船舞踊を真似する芸妓のこと、赤い衣を着する芸妓、言い換えれば、紅衣人と謂う。
- 7 昔の中国では、よく美人の意、および遊女の意を表す。『漢書』に美人を「一顧傾人城，再顧傾人国」と表現したのに基づき、古来君主の寵愛を受けて国（城）を滅ぼす（傾ける）ほどの美女をさし、のちに日本語の遊女と同義語となった。以来、琉球時代の場合、遊女の対語になった。とくに日本の近世、江戸時代、歓楽街（かんらくがい）、廓（くるわ）で遊ぶ客と遊女の様子を描いた作品をさし、最高位の遊女を傾城（けいせい）と呼ぶことから名付けられた。同時に、①絶世の美女、傾国と②遊女、特に芸能を身に着け、上級の遊女を（大辞泉より）、琉球・沖縄にも襲名される。
- 8 このいわゆる新しい発見は、すぐに中国で騒動と論争を引き起こした。作者は基本的に様子見の姿勢を取った。発見者がなんとか筆者に連絡を取り、筆者に委託したため、筆者は沖縄のメディアで紹介し、データを日本語に翻訳した（未発表）。したがって、ほかの論文の発表後、陳正宏教授は、陳毓熙教授（元中国社会科学院文学所所属、故人）が『文学遺産』（2010年6月号）に投稿し、『琉球国誌略』は沈復が書いたものではない」という論旨を発表し、いわゆる新発見された資料を「続琉球国誌略」と対照して考察すると、三つの重要な日付が間違っているが、物語の内容は仮想的ではなく、歴史的、文化的価値があるため、同時期に沈復と一緒に琉球に来た別の未知の従客の作品かも、と推論していた。ここで二陳教授に感謝の意を記す。

くれ、とくにその『海国記』を日本語にしてから発表してほしいという要望があった。が、同時に中国大陸内で、尖閣諸島(中国語の釣魚島)の議論が起こってしまい、台湾の専門家も巻き込まれ、日本側は、やや冷たい反応だった。つまり、清末および民国初の関連する偽書の繰り返しではないのか、と見なされたのである。

そのため、翻訳された原稿は未完成のまままで今日までに眠らせたままである。幸い、同資料は、2010年4月、中国にある人民文学出版社より、『(新增補)浮生六記』という本の形で出版され、一つの新史料の形で公開された。今回の日本語翻訳発表は、以前にいただいた写真版を同書の資料に加えて工夫したものである。

しかし、同書は、今までの偽造されたものを後列して参考になる以外にも、古文獻として、簡体字で活字になるのは、少し残念なことであるが、元の抄本の写真のコピーがついているので、読者が参照できるようにしている。『海国記』を含んでいるこの抄本資料『記事珠』の真偽について、様々な議論はあったが、詳しいことについて別途の文章を参考にしてほしい。ただ、著者は、沈復ではなく、別の従客である、という主張をしている論説も存在している。それは、『〈琉球国記略〉非沈復之作考辨』(陈毓黻 载《文学遗产》2010年第6期)である。この論文は、著者として絶筆の作、『〈琉球国記略〉非沈復之作考辨』、2009年の出版物『浮生六記』中の第五章である「中山記歴」の原稿であると、噂されていた『琉球国記略』について入念な調査とテキスト調査を行った。

『浮生六記』の新版に集められた『(冊封)琉球国記略』は、『琉球国記略』と改名されるはずであると提案。それは、公式書の『統琉球国志略』と比較すると、嘉慶十三年に行った琉球旅行に関連する三つの重要な日付がすべて間違っていることがわかり、また執筆のさまざまな側面から勘案しても、そのスタイルより沈復の著作ではないわけである。つまり、その著者はおそらく文章の韻律に堪能な別のメンバーの一人ではないのか、と判断される。彼もこの旅行を個人的に経験したので、前述の知識は作り上げられたり、つなぎ合わされたりすることはなく、特定の歴史のおよび文化的価値がある。ただし、日付を修正する必要があると思う(陈毓黻)。ここでは疑問として保留しておく。

## 二、本史料の日本語翻訳

原文：

『(冊封)琉球国記略』：

嘉慶十三年，有旨冊封琉球國王，正使爲齋太史鯤，副使爲費侍禦錫章。吳門有沈三白名復者，爲太史司筆硯，亦同行。

二月十八日出京。至閏五月二日，始從福建省城啟行登舟，舟長八丈餘，闊二丈餘，船身飾以黃色，上列旗幟甚多。次日，兩冊使奉節詔至，護送者爲福州左營副將吳公安邦也，帶兵弁二百二十名，分撥兩舟，各帶炮位。冊使與從客共一舟，名曰頭船，上下舵工兵役共計四百五十餘人，各有腰牌爲照。

每日乘潮行一二十裡。至十一日，始出五虎門，向東一望，蒼茫無際，海水作蔥綠色，漸遠漸藍。十一日(按：結合上下文，疑爲筆誤，似應爲「十二日」)過淡水。十三日辰刻見釣魚臺，形如筆架。遙祭黑水溝，遂叩禱於天后，忽見白燕大如鷗，繞樯而飛。是日即轉風。十四日早，隱隱見姑米山，入琉球界矣。十五日午刻，遙見遠山一帶，如虬形，古名流虬，以形似也。(圖三)

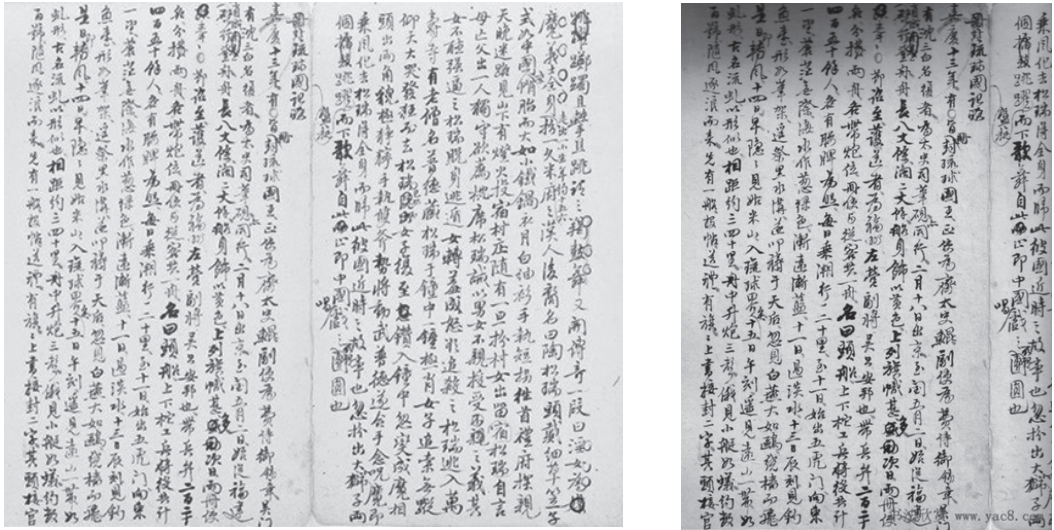


図1 「(冊封)琉球国記略」:

訳文:

嘉慶十三年(1808年)、皇帝は太史の齊鯤を正史とし、侍御の費錫章<sup>9</sup>を副使にし、琉球国王を冊封するため琉球王国へ派遣した。その際、呉の門中の沈三白という人が、太史司の秘書として同行した。

陰暦の2月18日、北京を出て、5月2日、福建省都から船に乗って出発した。船は長さ8丈余り、広さ2丈余り、船体は黄色に塗られ、旗幟が船上に数多くたなびいている。翌日、二人の冊封使節は奉節の詔を持って到着し、見送り者は福州の左營副将官の呉安邦<sup>10</sup>であった。彼は兵士220名を率いて、船二隻に分けて配置していた。それぞれ砲を備えていた。冊封使は供のものと一緒に一隻の船にのった。それを頭船と言う。上下兵士あわせて450人ほど、一人ずつ腰牌(勘合、入門証)を持たなければならなかった。

船は潮の流れに乗り、毎日10~20里ほど前進していく。5月11日、五虎門を出た。東を望むと、広々として果てしなく、海水はネギの緑色のようで、船が行けばいくほど海水の青はふかくなる。12日、淡水を過ぎた。13日の辰の時刻、釣魚台が見えてきた。その島の形は筆立てのようである。遙か黒水溝を祀り、それから天后に叩頭して祈った。忽ちカモメのような大きさの白燕が飛んできて、帆柱の周りを飛んでいるのが見えた。その日まもなく風向が変わった。14日の朝、かすかに姑米山の影が見えてきて、琉球の領域に入ったはずだ。15日目の昼、遙かに山地帯のようなものが見え、虬形のように、古い名は流虬<sup>11</sup>といい、確かに外見がよく似ているようだ。

原文:

相距約三四十裡、舟中升炮三聲、俄見小艇如蟻、約數百號、隨風逐浪而來。先有一船、投帖送禮、有旗、

9 齊鯤 (Qi Kun 1770 -1815) : 字澄瀟 (Chengxiao)、福建省福州出身。嘉慶六年の進士及第。嘉慶十三年、琉球冊封正使に命じられ。中国に帰国後、河南省洛陽知府(市長相当)に任命され、後に睢州の河公(川を治理の担当)に異動した。途中、父の訃報で帰郷。『東瀛百詠』で有名; 費錫章 (Fei Xizhang) 字煥槎 (Huancha)。浙江省湖州の出身で、乾隆四十九年の挙人で順天府府尹に致仕した。彼の死後、兵部侍郎の名に追封された。『賜硯齋詩存』という遺著がある。

10 呉安邦、台湾の彰化出身。彼は嘉慶一年(1796年)丙辰科より武進士で、その後、閩安に副將軍を務めた。

11 虬、首部に角のあるドラゴンという。

旗上書“接封”二字。其頭接官爲紫金大夫(2)。所引小艇，皆獨木爲之，長不盈丈，寬二尺許，兩艇並一，如比目魚，人施短棹，分兩行，挽引大船纜索，如蝦須然。有紅帽者，執旗鳴鑼，爲領隊押幫之秀才官也。未幾，又有鳴鑼而來者，爲二接之法司官，投銜貼請安。三接官爲國舅，率通事官登舟參謁(3)，冊使命辭免。

至其口，曰那瀟港。南山屏列，北築石隄如長虹，以禦潮汐。堤首有小山如伏虎，設炮臺於上。封舟將到，即聞大炮三響，旋聞金鼓銅角之聲，萬人齋列。及進口，始見樂人排班，分左右行。前列紅邊黃旗兩面，大書“金鼓”二字，後列號筒二人，喇叭二人，鼓四人，鑼四人。但聞音韻悠揚中雜以角角咚咚而已。兩岸聚觀者，以數萬計，男女莫辨。

封舟身重不能抵岸，乃橫小船，架板作浮橋，以達封舟。岸上有屋三楹，額曰“卻金亭”，國王迎候于此，自稱琉球國世孫尚某，亦用紅手版，王冠烏紗帽，兩翅彎曲向上，衣元青龍袍，金帶，皂靴，容貌清臚，年僅二十二歲，跪迎於亭中。正使持節，副使捧詔，又聽升炮三聲，乃登岸，奉節詔于龍亭。天使二人，皆乘八座。

至中途，有迎恩亭，國王設香案，率其眾官，行三跪九叩首接詔禮。

禮畢，王前導，至天使館。正廳曰“敷命堂”，迎詔勒奉安正中，天使立左右，王率眾官行請聖安禮，然後與天使行賓主禮，就坐，三獻茶，即辭去。天使送庭下，王揖讓，亦乘八座回宮。

十六日，迎天後進天后宮。天使出館，各廟拈香，答拜國王。回館，于大堂升座，護送武弁，率水師兵披甲擺隊進參，示威遠也。

天使館制悉仿中華，前列旗竿二，旗上大書“冊封”二字。旁設吹鼓亭，每日辰、午、酉三時奏樂三通，排對中門而立，金鑼畫角，一如迎舟之樂，奏畢，各散去。東西兩轅門外，俱鋪白沙，瑩白如雪。

儀門內即敷命堂，堂後有穿堂至第四進後堂。堂之東，有樓曰“長風閣”，爲正使起居之地，其西則居副使，登樓皆可遠眺。其兩廡東西二十間，隨從諸人居之。館之周圍牆垣甚厚，皆礪石，石多皺紋，有小孔，形如骷髏。牆頂植草，葉如萵苣，不土而生，秋冬長茂。

#### 訳文：

海岸まで約三、四十里の距離になると、船から大砲を三発打ち上げた。しばらくすると、数百隻の小舟が、風に乗り波に追われてアリののように集まってくる。先頭の一隻が、親書を呈して挨拶を捧げくれた。そして、旗の持参があり、旗には“接封”の二文字が書いてある。その「頭接官」は紫巾官であることがその後わかった<sup>12</sup>。連れてきた小舟は、すべて一本の木(丸太)で出来たものである。長さが一丈に満たず、幅は二尺ぐらいである。二隻をひとつに併せていて、ヒラメのように見える。人々は短い櫂を操り、二列に分かれ、大きな船を牽引して進む。船の引き綱は、まさにエビの鬚のように見える。赤い帽子をかぶり、旗を持って銅鑼を鳴らし、指揮を執っているのは秀才官である。しばらくすると、また銅鑼の音が鳴りながら、二段階目迎えにきた法司官がやってきて、親書を呈してご機嫌をうかがった。三段階目の接封官は国舅が、通訳官を連れて船に上がり恭しく挨拶したので、冊封使がそれをおしとどめた。

湾岸の出入り口に至ると、那覇という港に行く。南山は屏風のように横立てて、北に向け長堤を築石し、まるで長い虹のようで、かつ潮汐をふせぐ。長堤の端に伏虎のような小山があり、その上に、砲台が設けられてある。

12 紫巾(金)大夫：琉球国にある地元出身の琉球王国の高官。紫のハンカチのスカーフと金の花と銀の柱のヘアピンを身に着けていることから、「紫のスカーフドクター」(俗称か)と呼ばれている。同時の場合、特に久米村最高の位階で、正議大夫の上位に位置する。金糸の入った紫冠を戴くのが名称の由来。1627年に蔡堅が昇位したのが史料上の初見。対内的な呼称は親方で、紫金大夫は対外的な位階名称である。

封舟がそろそろ着くとき、大砲の三発が響くと、すぐ金太鼓や銅号角の音が聞こえ、万人で齊列（排列の氣勢）の陣は目の前に映った。さらに入り口に入ると、楽人らしい班が左右二列のように見え始めた。前列の赤い衿の黄色の旗の二面、その上に“金鼓”の二文字を大書し、後列はメガホンの二人、ラッパの二人、太鼓四人、銅鑼四人を並べている。音韻の悠揚なメロディの中、角角どんどん（カンカンドンドン、いずれも擬態語・擬声語）と音が聞こえる。両岸に集まって見る者は、数万を超え、男女の区別もつかない。

重量のある封舟は浅い岸に近付けぬので、小舟を横に並べ、その上、板を敷いて浮き橋のようにつなげて封舟に達する。岸の上、三軒の母屋があり、扉の額には「却金亭」<sup>13</sup>と書かれている。国王はここまで出迎えに来られる。自己紹介で琉球国の世孫であると称する尚氏は、赤い笏を使って、かぶっている王冠は文官の帽子らしく、二翼が彎曲向上し、衣服は玄青の生地に竜の模様入りの長着、帯は金色、黒い長靴で、容貌はやせ、年はまだ二十二歳ぐらい。王は、ひざまずいて（あずまやの中で）亭の中に節詔を迎え入れる。正使は節を持つ、副使は詔をささげ持つことで、しばらくするとまた大砲の三発の音が聞こえてから、上陸が始まる。節詔を龍亭<sup>14</sup>に奉じた後、天使のお二人は、別々八座<sup>15</sup>の肩輿に乗って行進する。

途中で、迎恩亭があり、そこで香炉を置く机が設けられ、国王は衆官を率い、正式に三跪九叩の礼儀をしあげた。王は線香を立ちあげ、役人をつれて3回の膝巻きと9回の腰辞儀（三跪九叩の大礼）で勅令を受け取るように導いた。

対面の挨拶後、王が前導し、一行は天使館に到着する。正面ホールは「敷命堂」と呼ばれ、詔勅を真ん中の位置に正しく安泰させ、二人の天使はその左右に立ちながら、王は自ら衆官を率いて（中国皇帝への）聖安礼を行ってから、その後、国王が天使と賓主の礼を尽くす。座に着いてから、三回のお茶を捧げた後、失礼して帰った。その際、天使は庭の下まで見送り、お互い遠慮しながら丁寧に礼を尽くし、八座の肩輿に乗って王宮に帰る。

十六日目、天后様の像を天后宮に迎え入れる。天使は館を出掛け、各廟に焼香してから、国王に答礼の式典を行った。館に帰って、天使館の広間で正座が設けられ、護送する武官が水軍の兵を率いて鎧をつけながら、兵隊を並べて配列してから、参列に進むことで遠に威を示すわけである。

天使館内外の設置はすべて中華風を真似てつくり、前列の旗の竿は二本、その上で「冊封」の二字を大書する。傍に吹鼓亭を設け、毎日の辰、正午、酉の三つ時間帯で三通りの演奏をする。部隊は当面に当たり扉に向けて隊列し、金色の銅鑼や笙笛の斉鳴、だいたい迎舟の際と同じような演奏で行った。演奏は終わって、それぞれ解散して帰宅する。東西の二つ表門の外、すべて白沙を敷いて、きらきら光っていてまさに雪のようである。

13 贈与されたお金をお断りしたため、贈与側から記念やご褒美のために作られた亭のことをいう。史上、琉球時代には、数回の類似例があり、周煌をはじめ、中国の文人士大夫の品格が現れたことをいう。

14 古くからの皇帝の勅令を指し、龍が描かれたセダンの椅子に置かれていたことから「龍パビリオン」と呼ばれていた。

15 八座というのは、セダンチェアは八人によってかつぎ吊り上げるので、通称8抬のセダンチェア。



儀門内には敷命堂という建物があり、堂の後部には次と次へつながり廊下を通すと、第四進の庭や部屋がみえ、すなわち後堂と言うところである。堂の東面、「長風樓」という名称の施設がおかれている。それは正使の日常暮らしの場所で、その西は副使の居場所である。その長風樓を登ると、遠くまで眺望することができる。さらに、その両側には東西二十軒の部屋が並び、随行諸人の居場所でもある。館は厚い堀で周囲を囲まれている。それは全て砥石で築かれた。その石には皺や孔隙(でこぼこ)が多くあり、ざっと見ると髑髏の形のような<sup>16</sup>。垣の上には草(植物)を植え、葉はチシャのようで、土がなくても、秋冬の季節にも長く茂ってくるようである。

#### 原文：

至七月朔日、將舉行追封祭祭禮儀。從官四人、一爲捧詔官、一爲捧節官、一爲宣詔官、一爲捧帛官、先一日、通事官呈儀制、備轎馬、請從官至先王廟演禮。轎如鶴籠、編篋爲之、外施黑漆、內糊白紙、頂有大環、一木爲扛、離地僅五寸許。人由左入、盤膝而坐。

亦設靠墊、痰盂、煙具於其中。馬如小駒、剪鬃如驢、性甚劣、一馬需一人挽之。鞍鞵踏蹬、與中國稍異、起步細碎、如小川馬。

巳刻、出東轅門、過聖廟、東南行三裡許、至安裡橋、皆平坦。

過橋數武、即所謂先王廟者、山形環抱、廟居其中、蔭木森森、葉似柿而色深綠、曰波羅蜜樹。東西有朱漆坊、中爲三圈門、平其頂而無匾額。拾級而上、有堂三楹、設天使與國王坐位于中。再入後堂、即爲先王殿。殿五楹、兩廡十餘間、殿中神主前設三禦案、中爲奉節案、左爲奉詔案、右爲奉帛案。殿西簷下、設開讀台、東南向。

至次日辰刻、天使出館、詣各廟拈香。返、三法司及眾夷官備龍亭、彩亭、金鼓儀仗、集館門外。候啟門、奏樂、參謁畢、迎龍亭、彩亭入、正使捧節、副使捧詔、皆朝服。從官亦五品蟒服、趨向天使、恭接節、詔、幣、帛、各安亭中、左右立。階下樂作、引禮官唱排班、眾夷官皆跪、行九叩禮。升炮、夷官前導、排全副儀仗、皆中國兵丁爲之、著號衣騎馬者、約百餘對。其後則鹵簿、彩亭先行、龍亭在後。

從官佐使、皆張紅蓋乘馬隨于龍亭之後。兩天使皆八座、道旁男女聚觀者、循高就下、疊砌如鱗、而生息寂然、但聞馬蹄蹀躞而已。

至安裡橋、國王紫袍紗帽、率眾官迎伏道左。暫住龍亭、王與眾官平身、兩使降輿、趨前、分立龍亭左右、引禮官唱排班、國王及眾官行三跪九叩接詔禮。禮畢、國王眾官步行前導、至廟門、由東圈門進、立堂下。天使出、下轎、從官亦下馬、扶龍亭、由中門入、至庭中、捧節官授節與正使、捧詔官授詔與副使、隨行至先王殿、各奉節詔於所設之御座上、退立東墀、西向。宣詔官立開讀台下、東向。

兩廡奏樂、引禮官引國王由東階詣香案前、北向。司香者跪、進香于國王、王亦跪、三上香訖、復引至墀下、王與眾官各就拜位、行三跪九叩首拜詔禮。禮畢、樂止、退立東廡世子神位前、西向。又起樂、天使捧節詔正中立、捧詔官由東墀趨接詔書、即由中門高舉、下階、黃傘蓋之、上開讀台、宣詔官隨至台中香案下。樂止、引禮唱跪、國王及眾官皆北向跪、俯伏于世子神位下。引禮官唱開讀、宣詔官就香案正中朗聲宣詔。宣畢、仍捧詔下臺、張黃蓋、由中門入、授副使、仍安御座。引禮官引國王眾官各就拜位、再行三跪九叩謝封禮。引禮官唱退班、國王入廟、請天使暫憩、更衣、獻茶。

追封禮畢<sup>17</sup>、國王亦皂袍、角帶、出至先王神位前、天使復分立禦案如前儀、法司官請詔書、祭文供奉廟中、天使乃詣先王神位前、行一跪三叩禮、國王及眾官俱俯伏位側。禮畢、引禮官唱退班、國王捧先王神主、由東階入殿、供奉畢、向天使行謝封禮、一跪三叩、天使答拜。

16 珊瑚石の描く様子を形容する言葉。

17 ここで読者に留意してほしいのは、「追封」という言葉である。此処では「追封」するのは、尚成のことを指す。

禦祭禮畢，國王又易服，天使亦更衣，俱至前堂，行相見安坐禮。

天使居中，南向。國王居西，東北向。不設樂，茶酒皆親獻，天使辭謝。紫巾大夫代獻，天使酬獻，國王亦起辭謝。各就宴，從官則宴於西廡。酒饌皆秀才官跪而獻之，法司官旁席爲陪宴。宴既畢，國王前導，仍至禦案前，正使奉節，授捧節官安置龍亭內。天使行至階下，與王揖別，從官亦與法司官揖別。出廟門，國王眾官已先行，至安裡橋下，候龍亭至，俱跪送，天使降輿揖，回館。

是晚，國王遣官叩謝。其明日，天使亦遣巡捕官入王府答謝。

#### 訳文：

陰曆七月一日、まもなく事実上の王に爵位を与える御儀礼式典を追加で行い、つまり「追封」の儀を行う予定が近づいてくる。すなわち従官四人、詔をささげ持つ官、節をささげ持つ官、詔を宣する官、絹織物の帛をささげ持つ官から、一日先、通事の官を通して（「天使」側に）式典の順を呈し、輿と乗馬を用意し、従官を案内して先王の廟にたどり着き、式典の儀礼を演じる。輿はツルの巢のようなもので、竹の篋で編んできたもので、外面に墨漆を塗り、内に白紙を糊張って、頂上の部分は大きい輪があり、一本の太木で貫いて担ぎ、地面との隙間が五寸のみになる。人は左から入り、あぐらをかいて座る。

その肩越しの中には腰用クッション、痰壺、喫煙具などが設けられている。馬は小さく子馬のように見え、剛毛を鋏で切り、まるでロバのように見え、性情が非常に劣るらしい。一匹の馬は一人の牽きかけを必要とする。鞍具踏蹬の一切は中国と少し異なり、始めは小刻みで徐々に、四川省の小川馬のように走る。

午前九時（巳刻）になると、(冊封使一行は) 東の表門を出発し、孔子廟を通り過ぎ、東南の方向へ三里ぐらい行き、安里という橋まで、途中はほとんど平坦な道である。

橋を過ぎて数歩（武）の距離で<sup>18</sup>、すなわち先王の廟というところで、山々がぐるりと取り囲んで、廟はその中に位置し、周りの木蔭の木はうっそうとして、葉が柿のような形で色が深緑に、つまりジャックフルーツ（波羅蜜樹）といわれる木が見える<sup>19</sup>。また、東西側のウィングルームの間、朱漆塗りの坊があり、まん中には三つのドア（門洞）があり、屋根が平らで額もない。階段に従ってのぼると、真正面に三つの柱がある本館（母屋）の中、天使と国王の座席が設けられている。またその後ろにある館舎は、先王の殿である。殿の母屋の正面には五つの柱があり、偏殿には十数部屋ある。殿の中、位牌の前で三つの御案が設けられ、まん中は奉節の案であり、左は奉詔の案、右は奉絹の案の設置でもある。殿の西のひさしの下で、東南方向へ向け、帝詔を開読・開示する台が設けられている。

18 数武といえば、『詩・大雅・下武』により、武<量>半歩。古代では、6尺は一步であり、半歩は武という。目での観察範囲でそれは半歩ぐらいの間のみだろう。- 『国語』、劉勅「文心雕龍」など。

19 沖縄産 南国フルーツ、パラミツ（波羅蜜）というジャックフルーツのことだと思う。沖縄でもほとんど生産されておらず、琉球時代にも珍しいものとして仕入れた舶来種であるだろう。その原産：はインドや東南アジアなどの地域で、クワ科パンノキ属のもので、和名：パラミツ（波羅蜜）、英名：jack fruit（ジャックフルーツ）という。世界最大のフルーツとも言われる。果肉、皮さらに種まで食べることができる。スーパーフードでβ-カロチン、ビタミン類、カルシウム、カリウム、鉄分、マグネシウム、ミネラル類、タンパク質やそしてペクチン、食物繊維などが豊富、栄養価の高い、貴重なフルーツである。果肉のお味は、ドリアンに似たものとして、好き嫌いがある。タイやバリ、ベトナムではポピュラーなフルーツでもある。フルーツとしてはもちろん、煮物や炒め物などにも調理して食べる事ができる。缶詰やドライフルーツ、チップなどの加工品がある。

翌日の七時(辰刻)になると、天使が館を出られ、各廟へ巡りながら参り、香をつまんでたくこと(焼香・薫香)をされる。帰ってくると、三法司および琉球の衆官が竜亭、色彩のあずまや、金と太鼓の儀仗を用意して、天使館の扉の外で集まっていられ。扉を開けると、待っている琉球の迎えチームが一斉に演奏をしながら礼拝する。参拝をして終わった後、竜亭を迎かってその中の彩亭にあずまやへ入って、正使が節をささげ持ち、副使が詔をささげ持つことになり、皆が朝服の模様。琉球の属官らが五品の蟒服を着用し、天使に向け、恭しく下賜される節、詔、貨幣、絹織物を拝受してから、それぞれ亭の中に安置させ、皆はその左右に肅々と立ち並んでいる。

その間、階段の下で楽作が吹奏され、引礼官の歌のように高階な声で歌ってクラスの順序を決め、琉球王府の属官らは全てひざまずきながら、九回の大礼(三回ごとひざまずいて九回コウトウ(叩頭)<sup>20</sup>、地面までにノックという三跪九叩の大礼)を振り叩く。礼砲が打ち上がってから、属官の先導する後ろに、一式の儀仗に揃えて並べ、全て中国の兵士たちがやって行進する。彼らはみな軍装の格好をしながら乗馬で約百ペアの規模で装備されている。その後に「鹵簿」(式典関連名簿リスト)を載せる彩亭(東屋)が先に、竜亭は後につく。属官らと天使団が、みんなすべて紅張りの蓋をしながら乗馬して竜亭の後に従う。二人の天使が八人の力夫によって駕箱に乗せられ、道沿いに老若男女は大勢集まり、傍観者を見て、高さをたどると、(人の垣は)ウロコのように積み上がっているように見える。静かに息が止まる(ような)寂然さが感じられ、ただ馬の蹄を路面にかいで小またに歩き蹄鉄の音を聞くだけらしい。

安里橋という小橋までに、国王が紫の長衣や烏紗帽(明朝風の紺色の帽子、糸で緻密に編んだもの)を着用し、属官らをつれて道で迎伏の道の左に待機し、竜亭が国王一行に近づくと、一時止まれる際、王と衆官は身体を起こし、両天使が八人持ち上げ駕箱を降り、国王の前に近づいて、竜亭両側に左右に分立し、引礼官は歌ってクラスの順序を決め、国王と衆官は大礼(つまり、いわゆる「三跪九叩」：三つのひざまずき九つのノックという最高の辞儀)お辞儀をし、「帝詔」をひざまずいて受け取った。礼畢、国王および衆官は歩行しながら先導で案内し、国廟の玄関まで、東の正門から入り、本館の前に立ちならぶ。

天使の姿が現れると、ゆっくり駕箱を降り、ほかの属官らも下馬し、竜亭に手をかしながら、真ん中の正門から入って、庭の中に着くと、扶節官が節を正使にささげわたし、扶詔官が詔を副使にささげわたししてから、皆と一緒に案内されながら随行して先王の殿に足移り、それぞれ節や詔を設けられた玉座の上にささげ奉じ、庭の東の石段<sup>21</sup>の下に立ち上がり、西向けへ佇立する。宣詔官は解説台の前に立ち上がり、東向けへ。詔を朗読した後、偏殿から演奏しながら、引礼官が国王を東の階段を上って香炉を置く机の前まで案内、北向けへ。司香の者はひざまずきながら国王に線香をささげ、王もひざまずき、線香を三回捧げ、もう一度石段の下まで案内され、王と衆官はそれぞれ拝位に就いて、大礼(「三跪九叩」)という初の詔を拝する際、お辞儀を行った。礼畢、礼樂止まり、東偏殿にある嫡子の位牌が置かれているところまで退く、西向けへ。また起樂し、天使が詔を持ちながら真ん中に立ち上がり、捧詔官が庭の東の石段下のところから前へ向かって詔書をつないで、すぐ本館の真ん中の扉の前からそれを高く差し上げながら階段をおりて、黄色の傘<sup>22</sup>の下に参り、開読台まで上がると、宣詔の官は香炉を置き案台の机下にまで就き込み、

20 伝統中国、人々、上下関係や、人に重んじる頼みをする際、たとえば、師弟関係を作る際、その対象に自分の両膝をつき、手を合掌して地面に押し付けることを叩頭および磕頭という。現在、あまり行われない。

21 墀(chi)：階段の平らな地面。(ステップ間のプラットフォーム)。

22 黄色の傘とは、皇帝専用のもので、ここは、象徴的に天使に使われている。

楽が止まり、引礼官が大声で歌って「ひざまずいて頂戴」と、国王と衆官は全て北に向けひざまずき、嫡子の位牌の下でうつぶせになる。引礼官はふたたび歌い始め、詔を開示するようで、宣詔の官は香炉を置く机の中央につき、朗らかな声で宣詔した。宣畢、依然として詔をささげ持って台を降り、黄蓋という傘を開き、真ん中の扉から入って、副使にその詔を手渡して、依然として玉座に置きつける。引礼官は国王と衆官を案内してそれぞれ位に就き、ふたたびお大札（「三跪九叩」）を行い、謝封礼を行う。引礼官は再度歌いつき、順番に退場を案内する。国王は廟に入り、天使にしばらく休んでいただき、着替えやお茶を捧げる。

追封式典を終わらせてから、国王も黒の長衣、角帯を着け、先王の位牌の前に就き、天使は前儀のようにもう一度御案の両側に立ち並び、法司官は詔書を敬意で頼み、祭文は廟の中で祭り置き、天使が詣先王の位牌の前に参り、「一跪三叩」（一ひざまずく三回の頭を叩き）という礼を行い、国王および衆官は皆隣にうつぶせになる。礼畢、音頭の役割を果たす引礼官は歌って退場の合図をしてから、国王は先王の位牌をささげ持ちながら、東の階段から殿に入って、祭ることが終わった後、天使の謝封の礼を行い、「一跪三叩」の礼を叩いて、天使も折り返し答礼を尽くす。

御祭礼の儀式が終わり、国王はまた易服をし、天使側も着替えてから、みんな前堂に会合し、お互い気楽に挨拶してから座り込む。天使は真ん中に座り、南向けへ。国王の西に座り、東北向けへ、楽奏しないまま、お茶やお酒は皆自ら捧げて、天使は恐縮してお断りする。紫巾大夫が代わって捧げて、天使も折り返し応答した。国王も起きて恐縮の意でお断りする。その次、それぞれ宴会につき、属官の宴が西の廡（ウィングルーム、偏房）で行う。酒とさかなは全て秀才の官はひざまずいて捧げ、法司官は隣の席でお相伴をする。宴会は終わって、国王に先導され、依然として御案の前まで、正使が奉節をし、奉節の官にお渡し、彼がそれをささげ持ち、竜亭内を安置してまいる。天使は階段の下でおり、王と辞儀別れ、属官らも法司官と挨拶をして別れる。（私たちは）廟の扉を出て、国王と衆官たちはすでに先行して、安里の橋の下で会合を待っている。竜亭の到来を待っていて、みんなふたたびひざまずいて目線を送り、かえって天使が駕籠（肩越し）から降り、互いにお礼のお辞儀をした後、天使館に帰る。

その晩、国王はまた心遣いで、天使館に官を派遣してお礼を言い尽くす。その翌日、天使も特別に巡查という肩書の官を王府に派遣してお辞儀を礼拝して言い渡した。

原文：

至七月二十六日，始行冊封大典。前一日，從官先往王府演禮，由先王祠內，東度二小嶺，行于山脊，路尚平坦，民居嶺下，田園繡錯，竹樹陰森，行三四裡，始見高牌坊一座，上大書“中山”二字。過此百步，又一牌坊，大書“守禮”二字。路之中心，築方石臺，上植鐵樹一叢，以為來龍。隨見萬木排空，牆垣密佈，最高處宮殿巍峨，已至中山王府矣。

府門西向，上有敵樓。進門折南，漸高數級，有門北向。旁有一泉，鑿龍首嵌石中，泉從龍吻噴射而出，此中山之瑞脈也，名曰瑞泉。上有門，即名瑞泉門，門上有滴漏台。再折向東進第三門，

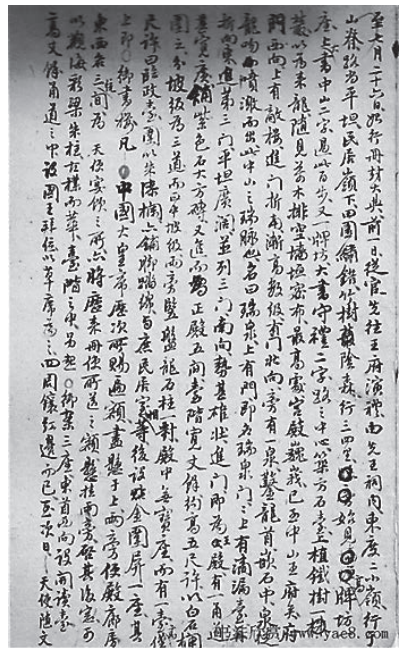


図2

平坦廣闊，並列三門，南向，勢甚雄壯。進門即爲王殿，有一甬道，甚寬廣，鋪紫色石大方磚。又進而爲正殿，五間，臺階寬丈余，約高五尺許，以白石欄圍之，分坡級爲三道，而正中坡級兩旁豎盤龍石柱一對。殿中無寶座，而有一台，高僅尺許，日臨政台，圍以朱漆欄，亦鋪腳踏綿，與庶民居室相等。後設金圍屏一座，其上即禦書樓，凡中國大皇帝歷次所賜匾額，盡懸於上。兩旁便殿廊房，東西各三統間，爲天使宴飲之所，亦將歷來冊使所送之額，懸掛兩旁。啟其後窗，可以觀海。彩梁朱柱，古樸而華。臺階之中，另起禦案三座，東首西向，設開讀台，高丈餘。甬道之中，設國王拜位，以草席爲之，四周鑲紅邊而已。(圖2) 参照)

#### 訳文：

七月二十六日から冊封大典を行う。その前の日、部下の秘書官が先に王府に行ってリハーサルをする。先王祠から、東へ二つの小さい丘を越え、山の尾根にそっていくと、道が平坦になり、民家が丘の下に散在し、田園の中に～繡錯<sup>23</sup>のように建ち交錯し、竹や樹木が生茂っている。さらに3～4里ぐらい行くと、一つ高い鳥居型の門と出会い、その上に「中山」という二文字が大きく書かれている。また、百歩あるくと、もう一つ鳥居型の門が見えてくる。その上には、「守禮」という大きい文字が書いてある。道の中心部に一つ四角の石台を築いている。中に一束の蘇鉄が植えてある。「来龍」<sup>24</sup>の意味であろう。そこから周りを望むと、万本の木が空を占めて、城壁が延々と続いているのが見える。最も高いところの宮殿は高くそびえて、すでに中山王府に着いている。

城門は西向きで、上に敵を見張る望楼がある。門を入れて南に折れると、階段があり、北に向いた門がある。そのそばに一つの泉があり、石彫刻の竜首が城壁にはめ込まれて、泉の水は竜の口から吐き出されている。これは中山の命の水で、名を瑞泉と言う。

さらに上に門があって、「瑞泉門」と名づけられている。その門の上に漏刻台がある。更に折れて東へいき、第三番目の門(訳者注：漏刻門のことだろう)をくぐると、平坦で広いところへ出る。そこには、三つの門が並んでいる。南を向いているのは、勢いはなはだ雄壯。その門をくぐると、すぐ王殿である。一本のとても広い通路が作られていて、紫色の大きいレンガが敷いてある。さらに入ると、正殿の五間があり、石段の幅の丈あまり、高さは五尺ぐらい、白石の欄干で囲まれ、三段あり。真ん中の段の両側に、石柱に巻きついた竜の彫りものが一對ある。殿中には玉座がなく、一つの台座があり、高さはわずか一尺ほどで、「臨政の台」と言い、それは赤い漆の欄干で囲んで、足置き布団が敷いてあり、まことに、庶民の部屋と変わらない。その後には金の圍屏(数枚の屏風で空間をつくること)が置かれ、その上は、すなわち御書楼である。すべて中国の皇帝が賜れた扁額が上にかけてられている。両脇は別殿廊房、東西おのおの三つの間で、天使が宴をするための場所であり、また、歴代冊封使節が贈った扁額が両側に掲げられている。その後ろの窓を開けると、海が見える。柱は朱に塗られ、素朴にして華がある。階段の真ん中に別に御案が三つ設けられ、東から西へ、開読台を設け、高さの丈余がある。道の中に、国王の拝位を設け、周りを赤で縁をとった蓆で作った拜位、国王を拜謁する場所が設けられている。

#### 原文：

至次日，天使隨文武官及從者至府，一如追封前儀<sup>25</sup>。王九叩禮畢，宴天使于西便殿，從官賓客則宴於東便殿，獻茶，進酒亦如前儀。惟觀者之多，更盛于前，蓋忝有該國文武官眷屬，設篷幕于路側。又有扶老攜幼者，合數萬人，

23 繡錯：田園や通路が経緯線のように縦横的に交錯し、刺繍のようになるらしい。

24 来龍：風水用語。起伏のある山脈を「ドラゴン」と呼ぶジオマンシーであり、来龍とは龍首里がいる場所である。

25 略写という意味であろう。つまり、この『記略』では、『冊封』(尚灝王、17代目)より『追封』(尚成王、16代目、七歳で死去)の過程を詳しく叙述している。

真大觀也。

其明日，王又易冠服，如漢黃門官式樣，坐龍輦，中設朱漆描金座，用四杠，前後十六人，其輦高與簷齋，儀仗則用大方旗四對為前導，繼則長杆刀六對，長杆槍六對。又有如月斧者、畫戟者、如狼牙槊者十餘對，皆柄長丈餘。又有三簷紅傘一頂，金鼓樂人二起間其中。近輦，則有執長杆大雞毛帚四對、大翎毛扇一對、月扇一對、大兜扇一把、提爐二對。扶輦者，皆紫金大夫與都通事官步行隨之。

又有童子，裝束如紅衣人者，各執拂塵，團扇之屬十餘輩，扶輦而行。王至使館，拜謝，亦如前儀。途中各設段落點綴，或編短籬而列盆花，或疊假山而栽松柏，像生鹿鶴，紙紮群葩，目不暇給。

舊例，國王逢五日遣官請安，十日王親謁，天使辭謝再三，乃逢十遣國相參謁。其儀制，天使設公座于堂，國相三法司行禮，天使出位旁立，拱手。紫金大夫則正立，餘皆端坐，聽其叩首而退，從官之相見各長揖而已。

案《琉球國傳》，自漢時天孫氏以來，皆姓尚氏，直至明洪武初，始奉中國正朔。其國本有南、北、中三王，本朝初年始並為一。其地皆山而無高峰，亦無城郭，其國境約寬數百里，中分三府，國王所居曰首裡府，亦名守禮府，掌國大臣多居此。次日九米府，永樂間遷中華人至彼，教以文學，有二十四姓，世居於此，掌理文牘，猶中國之翰林院也。三日那霸府，皆商賈所居。國中仕宦者，皆世官世祿，雖從唐制以詩取士應考，其實皆縉紳子弟也。

其所鑄用錢曰寬永，彼國之銀一兩可換錢一千六百文。刑罰無斬、絞、枷、號，有犯則送三法司究治。輕則杖之；若罪重，給一獨木小艇，驅入大海，聽其所往，詔之充軍；再重，則剝其腹而投之海。

其民皆食蕃薯，一歲三熟，每擔價不過百文。亦種粟、麥、米、豆，土人食不當飽，備作宴客之需而已。人多布衣，不尚桑蠶。

所屬有三十六島，或遠或近，均隔重洋。羽毛之族頗同中國，惟鱗介大半皆海物，有大蝦如升鬥，大蟹如草笠。魚則或藍或紅，莫可名狀，其味甚鯉，亦莫別其美惡也。有燒酒，有甜酒，又有白酒如漿，系國中女子嚼米釀成，其味甜，微有酒氣耳。

通國之人軀幹無長者，民安物阜，從不聞有盜賊之事。市中無店鋪，亦無茶坊酒肆。其舍宇四面御水者居多，不甚寬大，亦無有通三間者，周繚以板。室內皆鋪地板，高地二尺許，地板上用席墊布鑲而鋪之，名曰踏腳綿。男女皆席地而坐，門窗上俱鑿雙槽，重疊推拽以為啟閉，故柱多方，其木質若黃楊，磨極光細。庭前亦有假山，多嵌空玲瓏，平地鋪以白沙，花光樹色映帶清幽。或編竹為籬，屋藏於內，綠蔭鬱然。行人稀少，終日寂靜，亦不聞有口角爭鬥之事，間聞有弦歌之聲。

使館之西有女集場，一切器皿、食物、布匹、舊衣、新履，皆婦人首戴而來，坐地而賣，其婦通稱曰“愛姨”。每男以肩挑，婦以首戴，無論米糧、油酒、包裹、箱籠，雖重百斤，皆頂首上，從無有傾覆墮墜之虞。

其俗有醫師而無筮蔔星相之人，有僧無道，亦無優尼。

有寺曰樂善，在使館之後，竹籬矮屋，不施丹漆，曲廊環繞，綠陰蔽天，庭間鑿以小池，金魚游泳，鐘磬無聲，頗有幽趣。定海寺在那霸長虹堤之中，北臨大海，一望無際。亦有聖廟，在館東半裡許，規模如中國，而殿庭矮小，派秀才輪守之。

其冠服之制，男子年十六歲乃剃頂發中心，留其四鬢，挽一髻，插梅花簪三寸許。王及國相、法司官用全金者，紫金大夫金頭銀腳，餘官皆用銀簪，庶民則用銅簪。冠式長圓，平頂如僧尼帽，而前後有折釵文。有職者紅綾巾，大夫黃綾巾，紫金官以上皆紫綾巾，國相國舅則用紫錦巾。庶民冠元青荷葉巾。地保用綠布巾。衣如道袍，長領，袖寬一尺四五寸，色亦尚紅青，便服則各隨其色，束大帶，約寬四寸許。國相以至庶民皆著草履，名曰“撒霸”，式如中國之草鞋，底中起梁立一樞連之，高半寸，著則以腳背套其梁，大腳指夾其樞，以故，左右襪頭俱開一叉，不能易。襪甚短，及踝而止，以帶束之，男女皆然。

女子不裹足，不剃面，不穿耳，發無把，用油蠟塗，挽於頂心，形如牡丹，即所謂牡丹頭也。其光似漆。簪長七寸，粗如小指，作八角楞。簪之頭如調羹，向前倒插，金銀亦隨品而別，視其夫之品級。民婦則用角簪或玳瑁。

衣如男子而長及地，不帶不扣，以裡衣襟納入褲腰，右手拽外襟而行。未嫁者則束漢巾於外以別之。袖有寬至二尺餘者。婦人年過三十，手背刺紋作黑點，年愈大紋愈多，至老年則全黑，此不可解也。

其與人交際，客至，則脫撒霸於門，入室坐地，主人出，各鞠躬點首以爲禮。小童執茶壺如桃者，斟茶半杯，主人舉以敬客，客受之，高舉齋額而後飲，以此爲敬，他物亦然。亦吃煙，每人前各置一具筒、一爐、一痰盂，一總謂之打巴古棚。蓋煙謂打巴古，盤謂棚也。煙筒長僅尺許，煙甚辣。相對坐後，或清談或敲棋，倦則倒身而臥。

每宴會，極省儉，看不過四色，用黑漆盤分格盛之。酒僅一小杯，托以朱漆小盤，傳遞而飲，酒酣則坐臥歌呼以爲樂。飯曰屋滿，粥曰渥該，吃曰三小裡，魚曰遊，肉曰輻，鴨曰鴨飛拉，蛋曰科甲，貓曰抹牙，油曰暗淡，米曰科，去曰一迺，今日曰初，明日曰阿爵，遊玩曰阿嬉脾，拿來曰莫給科，好曰秋喇沙，不肯、不要，不好統曰沒巴歌，不懂曰悉各朗；一曰抵幾，二曰打幾，三曰米幾，四曰又幾，五曰一幾幾，六曰榮幾，七曰捺捺幾，八曰牙幾，九曰谷穀奴幾，十曰拖幾。惟茶曰茶，衣架曰衣架，衣曰衾索，面曰素面，而面又曰木吉利果，此三物大約起自中國，故仍舊名。其花卉種類甚繁，不能殫述。其他名物稱謂，類皆有音無字者也。其他名物稱謂，類皆有音無字者也。

#### 訳文：

翌日まで、天使は従者らとともにその国の文武官員の案内に従って、王府にいらっしゃり、昨日の追封式典と同じように儀礼をおこなう。国王が「三跪九叩」の大礼を取った後、天使のために西の別殿で招宴を行い、従客などのゲストのために東の別殿で招宴が行われ、献茶や献酒なども前儀と同じように進んだ。自国の文武官員の家族たちが路上両側にそれぞれのテントを設置したので、当日の民衆は昨日より大勢集まり、年寄りや子供らを連れて数万人の規模に相当するかもしれない、本当に人々の垣だらけ、いたるところに壮大らしく見えてくる。

その翌日、国王はまた冠服を着かえ、漢(中国)の黄門官の様式デザイン仕様の恰好で、竜輦(爪の四つ模様のもので)に乗用してまいる。その中に朱漆の金泥で塗り描く金色の座席が設けられ、それは四本の丸太の棒を十六人の力夫を使って持ち上げるものである。その竜輦の高さと路上そばの建物の高さと同じような高低、四対の長方形の旗を儀仗として先導し、つぎに長い手柄刀の六組が続いて、長い手柄の矢の六組も継続し続ける。また月のような斧もの、塗装された銚(画戟、兵器の一種)、オオカミの牙のよう、手柄の長い矛者の十組余りのようなもので、いずれにみな手柄の長さは丈余り。また三つ蓋の重ねになる赤い傘が一丁あり、金鼓楽人の二組がその中に重ねながらまざっている。竜輦の側近に、長い手柄の大きい羽根ほうきの四組があり、大きい羽毛の扇子が一对、月のような扇子も一对、大ファンのような扇子も一つ、手付きの香炉が二つある。竜輦を支える者は、みんな紫巾大夫と都通事の官たちで次々に歩行しながらついていく。

また童子が側において、身なりは紅衣女の恰好で、それぞれちり払いをとって、団扇のようなものを持っている十数人が、竜輦を支え行進する。王が公使館に着くと、前儀のように礼をお辞儀した。途中それぞれ道沿いに一区間一区間の飾りを設けて、あるいは短い籬を編んで盆栽を並べて、あるいは築山を豊んで松と柏のような常緑鑑賞木を盆栽にしておく。また生き生きとして見える鹿やツルなど、多彩な紙で様々な紙切り模様を飾り、めまいがするようだ。

旧例、国王は五日間ごと、官を差出て天使様にご機嫌をうかがう挨拶、十日ごとの日は、王が自らお目にかかって挨拶なさる。それに対し、天使らは恐縮して再三辞退した。だからこそ、十日間に一回、国相を派遣して天使館を参拝に臨むことにしてきた。その際の儀礼上の流れとして、

天使は堂で公の席を設けて座り、国相の三法司はお辞儀をしてから、天使が位置を移り抜け、そのとなりに立ちながら、拱手の礼をする。紫巾大夫は、別に立ち上がり、ほかの方々はみんな姿勢正しく座り、紫巾大夫の叩頭の合図を聞いてから退き、従官の間にそれぞれ深々とお辞儀する。

案『琉球国伝』により、漢の時に相当、天孫の氏から始まり、すべて尚氏という。明の洪武の初めに至り、中国の正朔を献上する（せいさく【正朔】を奉（ほう）ず<sup>26</sup>）ことに始まる。その国の基盤には、南山、北山、中山の三人の王がおられ、当朝（明）初年頃、やっと一つにまとまったらしい。その地はすべて山だらけだが特に高い峰嶺がなく、城郭がなく（ある意味で合理性のあること、つまり、中国と比べ、グスクはあるが、廓のないサイズといえる）こと、その国境の幅は広さ数百里ぐらいあり、領土は三つの部分に分けられ、国王の居場所は首里といい、また守礼府ともいう。国の大臣は多くここに住む。次は九米府と言い、明の永楽間は中華人をここに移住させ、文学を教え、二十四姓があり、世代間ここにすみこみ、公文書を作成なども担当し、まるで中国の翰林院だそうである<sup>27</sup>。三つ目は那覇府と言って、全て商人はそこに集中して住む。国の役人たち、世襲的で代々の俸禄を、中国の唐から詩で判定する受験（科挙といい）を実施しているが、実はその参加者は全て士族官吏の子弟ばかりである。

その国が鑄造して流通するお金は「寛永」と呼び、相手国の銀で一両は千六百文に換金することができる。刑罰の場合、首切り・首かせをはじめ、絞殺、より合わせて（枷）、号を切って（号）などがなし、犯罪を起こした場合、三法司まで送って決定する。軽い場合、杖で叩き責められる。もし重罪ならば、一隻ボートのような船（独木舟）で海に流し、つまり亡命のように（中国の場合、辺鄙地域に守衛兵）流される処罰に相当という兵役の刑に服させる。更に罪が重くなると、その人の腹を切開して（切腹）から、海に投げてしまうことになる。

その民は皆一年三熟になるイモを食べ、それは一担の価格ごとに百文を越えないものである<sup>28</sup>。粟、麦、米、豆をも植え、ただ現地人が食べるのは適当でいっぱいにならなくて、備作の客を招いて宴を張る必要分を貯蓄している。人の着るものは木綿の着物が多く、尚桑蚕は好ましくない。

所属は三十六島があり、遠かったり近かったりして、皆海が島々を隔てて、大海原に漂う小舟のようである。蛮族は中国にある「夷」とすこぶる似ている。ただ魚介の大半は全て海の産物である。エビが「昇闘」（中国にある稲米の伝統的計量器具）のように大きく、大きいカニは粗雑な笠のサイズのような。魚は藍または紅の色々、名状しがたくて、その種類は非常に多くて味が生臭い。そのうまさは良いのか悪いかがよくわからない。焼酎があって、甘酒があって、またどろりとした液体のような白酒があって、その国の女性が口でよく嚙んで発酵されてできた小酒である。

通国の人びとの胴は長いものがなく、民が安泰で物が満ち足りていて、滞在の間、盗賊の話聞いたことがない。市の中に商店がなく、茶屋や居酒屋もないそうである。住居は四面に臨水のあるものが多数を占め、あまり広くはなく、通三間のものもめったにない。周りは板で張り付けている。室内は全て床板を敷いて、地面より二尺ぐらい高い。床板の上に席（リードか）の上を

26 古代中国では、周りの夷狄が新しい王に立つと曆を改めたところから王の統治に従することで 臣民の地位や名分をもらえて安全保障の環境となる。

27 ここに留意するのは、三十六姓ではなく、二十四姓の言い方である。つまり、清の晩期まで、三十六姓は今日のように社会的普及されずに、沈復は、自ら聞き取り調査で得られた数字を記入したと思う。つまり、三十六姓という名称の濫觴は、戦後の頃からではないのか？

28 過去の貨幣は、銀一両は 1000 文銅銭に当たり、その十分の一は百文という。



布で敷いて埋め込んで、足を踏みの綿「踏脚綿」と呼ぶ。男女はみんな板の上にそのまま座り、扉と窓の上で二つの棧を作り、重複をおしてぐっと引っ張ると開閉するので、柱は正方形のものが多く、その木質もヒメツゲ（黄楊）と似ているため、強い日差しをさえぎる。庭前にも築山があって、多く孔を散りばめているのが精巧で、白沙で敷地の床にしつらえ、光樹の色を使うのは照り映える静寂である。または竹を編んで籬になり、家は内に隠れ、木陰は陰鬱としている。通行人はまばらで、一日中ひっそりと静まり返って、喧騒がなく、ところどころ琴と歌の音が伝えられてくる。

天使館の西には女性の集合の場があり、女性たちがそこに集まって、食品、綿布類、古い衣服、新しい靴を売っている。品物はすべて婦人たちが頭に載せて持ってきて、おろしてから座って販売している。その婦人たちの通称は“愛姨”と呼ばれる。男は肩で担い、婦人は頭で運び、米や食糧、酒、小包、トランクに関わらず、重さは百斤あっても、皆頭の上に乗せて歩き、途中で転落して落とすことは一切ない。

医者はいるものの占いや占星術をやる人はおらず、僧はいるが道士や尼は存在しない。楽善という寺院が、天使館の後ろにあり、竹籬に囲まれた低い屋、素朴で丹の漆を施なく、曲の廊下はめぐって、木陰は日をさえぎり、庭の間には小池があり、金魚が泳ぎ、人声がめったになく、すこぶる奥深い趣がある。定海寺というお寺是那覇にある長虹堤のなかにあり、北に海を臨んで、果てしない。孔子廟は天使館の東の半里ぐらゐの距離にあり、規模は中国のよう。ただ殿庭は低くて小さく、秀才らが順番に守りをしている。

冠服の制度は、男子は十六歳になると髪を剃っていちばん頂の周辺まで、その四鬢を残して、一つの団子に丸め、三寸のかんざしを挿し込む。国王および法司官は全金を使う者であり、紫巾大夫が金頭銀足で飾り、そのほかの属官が全て銀のかんざしを使い、庶民は銅のかんざしを使う。冠式の長い円のように、頂は平らな尼僧の帽子のようで、その前後に折鬘文<sup>29</sup>が描かれる。役職ある者は赤いあや絹の巾があり、紫巾大夫は黄色のあや絹（綾絹）の巾で飾り、紫巾以上の官は全て紫のあや絹の巾で飾られ、国相や国舅は紫の錦巾を使う。庶民は青い荷葉の巾で冠をしている。治安係（地保）は緑の布の巾を使う。衣服は道士の着服のようで、長い襟、袖の広さは1.45尺、色はまた尚紅青である。普段着はそれぞれその色に従って、大きい帯をくくって、約4寸の幅。国相から庶民に至るまで、全て草履をはき、名称は“サッパ”<sup>30</sup>と言い、形は中国のわらじのようである。底の中で起梁は一枢に立って、高半寸、着用する際、足の弓背書でその梁をかぶせて、大きな親指でその枢をはさむ。だから、その靴下の親指の所を分け、移ることがない。靴下は非常に短くて、足首まで帯で固め、男女とも皆したがって如く。

女子は纏足を巻かない<sup>31</sup>で、顔面の脱毛をやらない<sup>32</sup>で、耳あらをやらないで、髪の毛は結束なく、油蠟を塗って、いちばん頂心で引いて、形は牡丹のようで、つまりいわゆる牡丹風の髪の毛（琉球唐獅子牡丹髻<カラジ>）。その光は漆のようである。かんざしの長さは約7寸、太さ

29 鬘 (li) : 黒い色をいう。鬘文というのは、黒い色の紋様のような織物か。

30 現在のフリップフロップのように。

31 纏足ではないということ。

32 絞面といい、顔を開くもいえる。つまり、ギンゲヌードルは、西アジア、中央アジア、東アジアで長い歴史を持つ女性の顔の脱毛に二本の糸を使った、ツルツルに撚糸をして、脱毛効果および顔面の光沢を求め、伝統的な美容技術である。という、昔の中国では、女子は、成人になると、(旧時、婚礼の前に)女性が顔のうぶ毛を抜くこと。びんと張った糸で挟んで抜くことをする。絞というの、動詞、なう。より合わせる、3本の糸を1本により合わせる。捻出する。

は小指ぐらいで、八角の縁をしている。かんざしの頭はスプーンのように、前へ挿し込んで、金銀もその社会的地位に従って、その夫の等級により違う。庶民の婦人用のかんざしは角やべつ甲の材質を使う。衣服は男子の場合、長さは地面にまで垂れる。帯やボタンでなく、中前おくみでスプーンの胴のように逆に差し込んで入れ、金銀を使うか、その家のランクによって違い、つまり、その夫の品級によって決まる。庶民の婦人は、角質や海亀質のかんざしを使う。衣は、男性と同じく、長くたるんで地面ほど。帯やボタンを使わず、裏の前立てをズボン腰部に取り入れ、右手をぐっと外側の前立てを引っ張り前へ移動する。未婚者は漢巾をくくって区別する。袖は寛至の2尺の余がある。婦人は年三十歳を過ぎると、手の甲に、入れ墨紋様をつけいる。年とればとるほど、紋様が多くなり、老年になる全黒に代わる。これは、あまりわからなかったので不可解のままになる。

人と交際する場合、客がいらっしやり、そのスリッパを扉の前に脱いで室に入り座り、主人が出てから、互にお辞儀をする。童(さん)は桃のような急須をとりながら、お茶を半分ついで、主人はそれを客にすすめ挙げ、客は受けて、お茶を額の高さにそろえて挙げてから飲んで、これによって敬意を表し、ほかの者にも類する。たばこも吸う。一人ひとりの前にそれぞれ一本の筒を置き、一ストーブ、一痰壺、合わせてタバコ棚をいう。たばこがタバコを言い、皿は棚という。

たばこスティック・キセルの長さは尺ぐらい、たばこは非常に味が強そうである。互いに対面して座った後、おしゃべりや囲碁をしながら過ごす。疲れて眠くなると、横になって寝る。

招宴する際、とても質素で、料理のおかずは四種類にすぎない、紺色の漆で周囲を巻いて格の盛之(ピンシーの支度か)を分ける。酒は小さいコップ一杯のみ、朱漆の盤にのせられ、順次伝えて回して飲む。酒が深くなりしみじみすると、横になって歌いながら、大喜びで爽快に楽しむ。日常用語でたとえば、(飯曰屋満、粥曰渥該、吃曰三小里、魚曰游、肉曰犏、鴨曰鴨飛拉、蛋曰

科甲、猫曰抹牙、油曰暗淡、米曰科、去曰一迥、今日曰初、明日曰阿爵、游玩曰阿嬉脾、拿来曰莫给科、好曰秋喇沙、不肯、不要、不好统曰没巴歌、不懂曰悉各朗;一曰抵几、二曰打几、三曰米几、四曰又几、五曰一几几、六曰荣几、七曰捺捺几、八曰牙几、九曰谷谷奴几、十曰拖几。惟茶曰茶、衣架曰衣架、衣曰衾索、面曰素面、而面又曰木吉利果)などを名付ける、この三つの物は大体中国から伝来、だから元の名のまま。その花卉の種類は非常に繁雑で、すべて述べるができない。

その他の名物の呼称、種類は発音があって文字がない。

原文 琉球国演戯

琉球國亦唱戲。天使至，則於便殿前，搭戲臺一座，高與階齋，方廣三丈許。後場有大松樹一株，枝飛簷外。有彩無燈，歌舞者非伶人，皆國中搢紳子弟爲之，年皆十六七，無有老年者。

其開場無鑼鼓，但聞場後連打竹板聲，即見一老人戴荷葉巾，披深黃色大襟衣，有似鶴髦<sup>33</sup>，束藍帶，手執藤杖，白須飄然，率

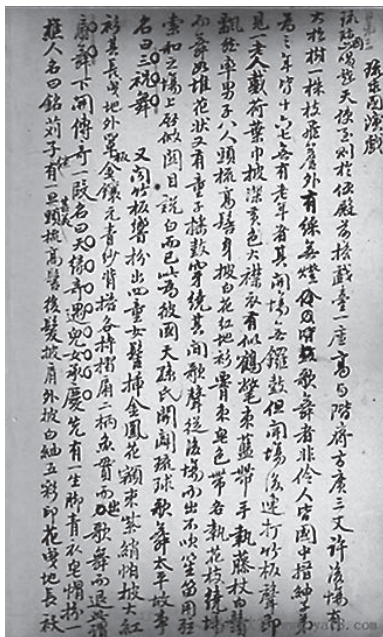


図 3

33 鶴髦：ツルの羽で作った豪華なコート。

男子八人、頭梳高髻、身披白花紅地衫、腰束皂色帶、各執花枝繞場而舞、如堆花狀；又有童子搖鼓穿繞其間、歌聲從後場而出、不吹笙笛、用弦索和之、場上啟、做關目說白而已。此爲彼國天孫氏開闢琉球、歌舞太平故事、名曰三祝舞。

又聞竹板響、扮出四童女、髻插金鳳花、額束紫綃帕、披大紅衫、其長曳地、外罩板金鑲元(玄)青紗背搭。各持摺扇二柄、魚貫而出、歌舞而退、此謂扇舞。(図三参照)

### 訳文：琉球国演劇

琉球国もまた演劇をする。天使(冊封使節)がいらっしゃると、別殿の前で、一つの舞台を立ち上げ、高さは階段ぐらいに従がい、広さは3丈(約10メートル)余りである。その舞台の後方(背景幕)には大きい松の木が一本あり、傘のように枝が軒先の外に伸びている。色彩はあるが明かりはない。歌舞者は非役者だが、すべてその国の中の紳士の子弟たちがつとめ、みんなの年は16、17才ぐらい、しかし年配者はいない。

劇を開始する際、銅鑼と太鼓の響きがなく、ただ幕の裏から三板(さんば)が打たれた後、一人の老人が荷葉の布をつけ、深い黄色の上前衿の部分の衣服をはおって、ツルの外套のようなことがあって、藍帯をくくって、藤の杖を執って、白い鬚。その老人が八人の男子を率いて、頭は高髻風の髪の毛が洒落ている。身は白いポーナスシャツをはおって、腰は黒のインクリボンをくくって、花の枝を持ちながらそれぞれ劇場を踊ったり回ったり、順序に積み重ねに堆花(花模様の飾り物)のようになる；また男子の子供は鼓を揺らしながら舞台を通りぬけ、歌声は自陣から抜きんでて、笙や笛を吹かなく、弦のロープと合わせて、場内は関目を開けて、せりふに過ぎない。これはその国を開きつづけた天孫氏の琉球を切り開いて、歌舞昇平の物語を語り、名は三祝舞と言う。

また三板の音を響かせて、四人の女の子が扮装して出回り来る。たぶさに金鳳の花を挿し込んで、額には紫の生糸のハンカチをくくる。長い深紅のシャツをはおって地面まで引いている。その上に板金鑲元の張りを青い紗のベストを掛ける。それぞれ2柄の折り扇子を持ってあおぎながら、つらなって出て、歌ったり舞ったりしてから退いていく。これは扇舞(せんぶ)と言う。

### 原文：

下开传奇一段、名曰《天缘奇遇儿女承慶》。先有一生脚、青衣皂帽扮一樵人、名曰銘荊子。繼有一旦、甚美、頭梳高髻、後發披肩、外披白綃五彩印花曳地長襖、內襯銀紅衫子、肩上蟠大紅風帶一條、扮一天女、從松樹上下臺心、即將風帶解下、掛於樹上、似作沐浴之狀。銘荊子竊帶藏之、天女失帶、惶懼不能飛升、與銘荊子問答良久、遂爲夫婦。生一女名真鶴、年九歲、又一男名思龜、年五歲、皆七八歲小童扮之、唇紅齒白、妝束逼肖。是時騙兒女眠於榻上、忽然尋出風帶、徐徐登松樹上、將升天矣。下顧兒女作悲泣狀、兒女驚醒、追呼樹下、天女已至松頂、忽有白雲從天而下以迷去路、其雲皆棉花結成。銘荊子亦追尋至樹下、與兒女對松樹大哭。忽出一大夫問銘荊子、回奏知國王、召其父子賜以爵祿、並收其女入宮撫養。此其開國時之故事、其場後之松樹專爲此而設也。此樹甚高、已百年物矣。

又聞竹板再響、四小旦扮四女、裝如天女而無風帶、頭頂五彩笠子、曼聲弦歌而上。舞有頃、各除笠、上下盤旋而進、謂之笠舞。

又開傳奇一段、曰《君爾忘身救難雪仇》。一淨脚兩額染脂、童顏鶴髮、戴黃緞金鑲風兜、身衣古銅色緞衫、外罩天青金雲龍背心、腰插寶刀、手執兜扇、自稱按司、名八重瀨。按司者、似乎彼國之諸侯也。路遇玉村按司、夫人貌美、殺玉村而奪其妻。妻不從、殉節死。其子逃匿平安大主家、八重瀨欲搜緝除害。玉村有家人之子名龜壽者、

別其母，投平安大主家，見小主，願身假做小主，出獻以代死。小主不從，如《一捧雪》換監代戮之狀。既而允從。平安大主有家將，名吉田，假縛龜壽爲玉村之子，授獻八重瀨。令下監，受盡諸苦而欲殺之，吉田假降帳下。又有玉村大臣名波平者起義，與平安大主合兵一處，奉玉村子小按司爲父報仇。斬關而進，殺八重瀨於帳下，救出龜壽，仍立玉村之子爲按司。此明季彼國分南、北、中三王時之故事也。小按司係十二三歲之俊童，其裝束如水門中之小青，不穿裙耳。凡逢殺戰不在當場，皆入場後作播鼓叱吒聲而已。

又聞竹板響，見男子四人頭束紅帕，衣著花襖，腰圍闊帶，腿纏青袖，手執羯鼓，其聲咚咚。又有四童，裝束亦如之，則手執短竹，擊生角角，滿場自出躑躅，且擊且跳，謂之羯鼓舞。

又開傳奇一段，曰《淫女爲魔義士全身》。走出一小生，年約十五六，扮一久米府之漢人後裔，名曰陶松瑞。頭戴細草笠子，式如中國涼帽胎，而大如小鐵鍋，衣月白袖衫，手執短拐，往首禮府探親。天晚迷路，見山下有燈火，投宿村莊。隨有一旦，扮村女出，留松瑞宿，自言母亡父出，一人獨守，欲薦枕席。松瑞誠以男女不親授受之義。其女不聽，強逼之，松瑞脫身逃遁。女轉羞成怒，欲追殺之，松瑞逃入萬壽寺。有老僧名普德，藏松瑞于鐘中，一鐘極肖。女子追索無蹤，仰天大哭，發狂而去。松瑞已出，而女子復至，鑽入鐘中，忽變成魔相，頭出兩角，貌極猙獰，手執雙斧，勢將動武。普德遂合手念咒，魔即乘風化去，松瑞得全身而歸。此彼國近時之故事也。

忽扮出大小獅子兩個，跳躍盤旋而下，歌舞自此止，即中國唱戲之所謂團圓也。（以上內容爲雜記抄稿圖片〈冊封琉球国記略〉条之前的部分、その前の内容は未公開で不明。）

#### 訳文：

また次の舞台では、名称は「天縁奇遇儿女承慶 天縁の奇遇 子供の歓喜」（メカルシー）と名付けられた。先に男が現れる。青衣と黒い帽子を着用した木こりに扮装して、名は銘苺子である。次に、一人の天女が非常に美しい装いで登場した。頭は高簪をといて、後肩掛けは、白く薄い絹織物の長い裏付きの上着をはおって引いている。内は明るい朱色の着物で、肩の上で深紅の帯は風にとぐろを巻くように舞う仙女に扮装している。マツの木の上から降りてきて、間もなく羽衣を解いてから、木の上に掛け、入浴を行うようである。銘苺子はその羽衣を盗んで隠し、仙女は羽衣を失ってしまったことに気づき、恐れて舞って飛んで上がることができなくなった。銘苺子との問答がしばらく続くと、結局、夫妻になってしまった。一人の娘を生んで、真鶴という名前が付けられ、九歳の年ごろ。またもう一人の息子を生んで思亀という名前で、五歳の年ごろ。全て七、八才の童（さん）が扮装して、唇の赤、歯の白が化粧をして際立っている。ある時、仙女の母親が息子と娘をだまして寝台の上で眠らせた。こっそり羽衣を探しだし、徐々にマツの木の上まで登って、昇天しようとしたとき、下にいるご愛顧の息子と娘はそれを見て悲しみ泣くことになった。息子と娘は驚いて目を覚まして、追って木の下で悲鳴をあげた。仙女はすでに松の頂上に着き、突然、天より白い雲が下りてきて、その追跡を迷わせる。その雲は全て綿のようにつながっている。銘苺子も樹の下まで追いかけて、息子と娘と一緒にマツの下で大いに泣き声を発していた。この時、突然一人の紫巾官が現れ、銘苺子に事情を聴きとった後、国王にご報告をした。それを知った国王はその父と子を呼んできて、爵位と俸禄を賜り、そしてその娘を宮廷に入れて育てる。これはその国が開国したときの話である。その場の背景として設けられたマツの木はもっぱら素晴らしいもので、非常に高く、すでに百年になる物らしい。

また三板が更によく響いて、四人の少女の役柄は四人の女性に扮装し、その恰好が仙女風なので羽衣のようなものなく、頭のとっぺんに五彩の笠をかぶり、ゆっくりと琴と歌とともに上昇する。踊りをしばらくすると、それぞれ笠を割って、上から下までぐるぐる回って進んで、いわゆ

る「笠の踊り」である。

また次の舞台になると、「君よ、身を捨てて難を救い復讐しよう(君尔忘身救难雪仇)」(忠臣身替の巻)と名付けられる。一つ裸足で額は脂で染めて、白髪童顔で、黄色の緞子の金鐘風をつけて包んで、身の衣服の濃い褐色の緞子のシャツ、上っ張りの赤みがかった黒の金雲竜のベスト、腰は宝刀に挿し込んで、手はとってうちわを包んで、按司を自称し、名は八重瀬という。按司者、相手の国の諸侯のようなことに相当。八重瀬の按司は、玉村按司の夫人はとても美しいので、玉村按司を殺してその妻を奪い取ろうとするが、その妻も切腹し、死んでしまうのだ。玉村の嫡子のその子は平安名大主大主家にと勝連へ逃げ隠れ、八重瀬はその嫡子がいずれ仇を討ちに来るのではないかと思ひ、行方を探していた。しかし、それは八重瀬の按司に知られる。玉村の臣下里川の嫡子亀十が、若按司と偽り、八重瀬の按司につき出される。が、その母と離れ、平安大主家に身を投げて、小主に会って、自分の身を小主に扮装して、捧げて替わりに献身的に死ぬことを決意する。小主がいいえと言ひ、もしそうすれば、まるで「一握り雪」(『一捧雪』明の嘉靖年間の名劇)のような残酷な状況に陥ってしまう。結局、再三の要望で、最後にやがて承諾した。平安大主家にはお手伝いさんがいるが、名前は吉田といい、うそが亀寿を縛った後玉村の子として、八重瀬に捧げることにしたが、彼を監獄に投じ、諸苦しみを受け尽くして殺されそうになる。吉田もその傘下に仮に伏した。また玉村の大臣、名前は波平の者は武装蜂起と引き分けて、平安大主家と合流してしまい、玉村の小主按司に従がい、父のために復讐する。関陥落して進み、帳下で八重瀬を殺し、亀寿を救出した。亀十が若按司として拘束されている間に、兵を集め、八重瀬の按司を倒し、亀十を救出した。依然として玉村の按司として擁立された。これは明季の際、この国は南、北、中の三王に分けられた時の物語である。小さい按司は十二、十三歳の俊童に扮装し、その身なりは水斗<sup>34</sup>の中の小青(さん)のように、スカートを穿いていない。一般に戦いで殺す場面はその場で現れず、全て入場した後、その裏で太鼓をたたいて場を盛り上げる。

また三板がよく響いて、四人の芸者は四人の羽衣女に扮している。彼女らは風帯のない女神のような格好をしていた。頭には色とりどりの笠利をかぶり、綺麗な声で三線の音楽に乗って螺旋的に回りあがった。しばらく舞うと、それぞれ自分の笠利を外し、上下に回転しながら進めていく。それは、笠舞という。

さらに次の舞台に進むと、「執心鐘入(放縦な女性が悪魔 義士如何に全身)(淫女爲魔義士全身)」と名づけられた劇。一人の美少年が登場し、年は十五、十六才ぐらい、一人の久米府の漢人の末裔に扮装して、名は中城若松陶松瑞と言う。頭は細くて粗雑な笠をつけて、式は中国にある夏の帽子風で、そのサイズは鉄製のなべのようで、衣服の薄いあい色の紬シャツ、手は短い杖をとって、初めて首里府へ親族訪問する模様である。日が遅くて道に迷って、山の下に明かりがあることを見て村落の宿に泊まる。次に、恰好のいい女が村女に扮装して登場、松瑞中城若松を泊ませた。母が亡くなって父が家を出たことを言いながら、一人は寂しく耐えられず、一緒に寝かせてほしいと自薦したいと考えている。泊まりたいという男が若松だと知ると、承諾した。松瑞は小さいころから男女の自ら「授受不親」(未婚の男女は一室にしない儒道倫理)の教育を受けたので、女は若松への思いを遂げようとするが、若松はそれを拒む。しかし女は話を聞かず

34 「白蛇の伝説」のあらすじより。

無理強いし、それでも言い寄ってきたので、松瑞は抜け出して逃げ隠れる。女性は恥ずかしさのあまり怒り狂って、追いかけて殺したいと思ってしまい、松瑞は万寿寺末吉の寺に逃げってしまった。老僧の普徳座主が、鐘の中に松瑞を隠して、その鐘はどこにも異常がないように見える。女は追跡してもみつめることができず、天を仰いで大いに泣き、気が狂って去って行った。松瑞がすでにそとへ出てから、女子はふたたび戻ってきて、あけてその鐘にまわりつき、その中に入って、突然悪魔の鬼の様子に変わる。頭は両角が生え出来て、容貌はきわめて凶悪で、手に双の斧を執って、乱暴に行使用す。普徳がすぐに呪文を唱えて退治し、魔はすぐに風のように乗っ取り空と一体化し、松瑞はやっと無事に帰ってくることができた。これはこの国の近年の物語である。

突然、二頭の獅子が踊り出で、太鼓の音とともに跳びはね、【くるっと廻って】、歌舞はここで終わる。つまり中国劇の大団円である。

(訓読み：風に乗り化して去り、祥瑞全身に得て帰る。此彼の国近時の故事なり、忽ち扮してお獅子兩個出で鼓を打ちとびようしてくだり、歌舞これより止む、即ち中国唱戲の団圓なり。)

#### 原文：

琉球國亦有妓女，謂之紅衣人，其所居曰紅衣館<sup>35</sup>。向例，每天使至國冊封，准諸妓入館伺候。自嘉慶五年趙介山殿撰冊封琉球時，傳諭不准入館，遂爲定例。自國相以下均有所歡，每月纏頭脂粉之費，不過四五六金而已。

若天使至，則不許國人闖入紅衣館，恐生事端也。中華人每到紅衣館（按：即琉球國妓院），有賞識者，即聲價十倍，定情合意後，必贈一銀簪，帶之以爲榮。蓋民間俱用角者，惟妓女得中華人賞給始准戴耳。其款式如荷花瓣而腳長，每枝重五兩。其裝束百般，總無一定，有著白地青花衫，微映大紅抹胸者；有著五彩印花衫，束紫綉紗汗巾者；有綠地五彩白花衫，束大紅文絲帶者，皆薄施脂粉，豐致嫣然，令人消魂。亦能歌舞，或彈三弦，或鼓古瑟，或坐而歌，或起而舞。

#### 訳文：

琉球国にも妓女（芸妓）がいる。紅衣人（アカジンチャー、沖縄の方言でアカミーバイ、アグシタリー（江戸側）など）と呼ばれる。彼女たちの居場所は紅衣館と言う。慣例上、天使の冊封使到来ごとの際、使節団の滞在する場所である。天使館がいつものようにその紅衣館の紅衣人を依頼して冊封使節団の駐留地に入り、諸サービスの許可を与え、館に入って世話をするが、嘉慶五年から、趙介山を派遣して琉球へ冊封する際、嘉慶帝から聖旨が下り、今後いっさい入館する許可を出さずに、それから定例になった。国相をはじめ、みんなは好きな女性（愛人）を持ちながら、月で化粧品代の負担（纏頭）<sup>36</sup>が金の四、五、六さえある。

もし天使がいらっしゃれば、普通の庶民の入館は禁止される。もめごとを起こさないように考慮している。中華人は紅衣館（案：つまり琉球国の妓楼）にいらっしゃる時、ご褒美された紅衣人者の価値がすぐ十倍ほどあがり、さらに気にいられ、長期契約する際<sup>37</sup>、馴染みになると必ず一つの銀質の簪（かんざし、琉球語でジーファーという）を彼女にさし上げ、つけられた側も誇りに思う。なぜかというと、当時の民間では、かんざしのすべては動物家畜の角を使うため、ただ妓女（芸妓）は中華人から得られるものこそ、耳をつけることができる！と誇りに思うからである。そのデザインは蓮の花弁のように足の長いもの、一本の重さごとに5匁がある。紅衣人

35 紅衣人（侏儻）の詳しい情状について描くこと

36 纏頭：ヘッドラップ：売春婦に与えられる財産アイテムを指す。

37 それは、「ユーベー」「チミ侏儻」か、「ニーピチ」などの表現で、婚外夫人の意味である。つまり中国語の場合、妾（メカケ）の意味である。

の装飾は様々で一定の決まりがない。白地の青い生地を着て、中から少し深紅の胸(ブラジャー)<sup>38</sup>を透かして映る者もいる；五彩の花模様付けのシャツを着ている者も、紫の絹クレープの通風性のある布を巻いて着用する。緑地の五彩に白い花模様のシャツを着て、深紅の文の絹のリボンをくくる者もいる。みんな薄く化粧をして、豊かに美しく、人の魂が抜けるようだ。同じく歌い踊ることができ、あるいは蛇皮線を弾き、あるいは琴をふくらまし、あるいは座って歌ったり、あるいは起きて踊ったり。(要するに、ただの性行為のみでなく、歌謡や舞踊、料理でもてなす。——訳者)

#### 原文：

凡紅衣人盡無子。自八九歲賣身入館，教以歌，與人交接。後積財贖身，即買一美婢，自開門戶。年長則各有舊交，故無從良之例。其房皆南向，空前一架爲軒廊，後三架爲臥室，三面皆板，上施頂格，下鋪腳踏綿，潔淨而軟，如登大床。亦有箱籠、衣架、書畫，呈設古銅、瓷瓶、壺、杯、碗、茶具、酒器之屬。簷下亦鑿小池，蓄金鱗數尾，植芭蕉鐵樹於牆下。有一種名佛桑花，葉若桑而花如蜀葵，千瓣，五色俱備，有大紅色者。

男用團扇，女則半月。夜臥，則大席鋪室中，上施大帳，而復以衾枕之屬。亦點燭，式如風燈而高，外糊白紙，中燃油火，上有橫木，可以提攜，亦隨地可置，隨處可粘。燭皆純蠟，可以通宵。其餘起居飲食與中國無異。……其餘起居飲食與中國無異。(全文完)

#### 訳文：

どの紅衣人も子を持つことが許されない。八、九歳頃から身を売られ館（案：抱親と抱妓、つまり現地語でチカネーングァ）に入れてから、歌を教わったり、人に引き渡したり引き継ぐ。後になると財がたまったら、身を自分自身で身請けすることが可能になるし、また童顔美少女の一人を買いメイドにすると、自立して営業も可能になる。年上になると、それぞれ旧友があるので、だから Congrían にならないだろう（だから身請けされる例がありません）<sup>39</sup>。その部屋は全て南へ向いており、その前に一つ空間を空け廊下にし、その周り壁の三面も板で飾られ、部屋の頂上には天井で飾られ、下にマット（踏脚綿）を敷き、きれいに柔らかい感じで大きいベッドに踏む感じにするらしい。ほかにトランク、ハンガー、書画などもあって、さらにアンティーク風の高銅物や磁器製の瓶、つば、杯、碗、茶道具、酒器の属するものを設けている。ひさしの下にも小池を掘り開け、うろこが金色の金魚を数尾蓄えて飼い、壁の下でパショウやソテツを植栽している。一種の名前は、仏桑花（ハイビスカス）の花も植えているが、その葉は若桑のように、花は中国語で蜀葵というタチアオイの花が、多重な花びら、五色あり、大きくて赤い花びらは貴重である。

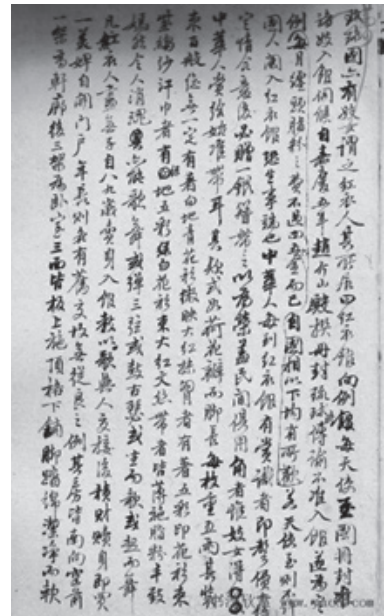


図 4

38 抹胸：古くからの女性用の下着の一種で、後ろ身頃はなく前身頃で、下着はお腹を、上着は胸を覆うことができる。背中ではエプロンも指す。

39 従良というのは、売春婦は本来の生活を捨て、女性（人妻）として結婚すること。

男は、うちわを使用し、女性は半月のような扇子を使う。夜眠るときは、大きいシーツを室の中に敷いて、大きい蚊帳を懸けて、布団や枕や枕タオルなどを上に載せて寝る。同時に蠟燭を点け、形は夜回し用の風灯（提灯）に似てやや高さがあり、外に白紙をのりで張りつけ、中は灯油でつけられ、その上に横の木があり、持ち歩くことができ、同じくどこにでも置くことができ、随所にくっつけて懸けることができる。蠟燭は全て純粋な蠟を使用し、徹夜でも大丈夫らしい。その他日常生活の衣食住などは中国に近いらしい<sup>40</sup>。



図5

コメント：

中国皇帝からの冊封使節の記録は、もともと彼らが見たことやしたことを宮廷に報告することを目的としていたが、ほとんどの文章は仕様の形式であり、李鼎元の「使琉球録」のみ日記形式が使用されて書かれた。物語の描写はより活気があり、旅の散文風で文学的な雰囲気溢れる。しかし、ゲスト（従客）として琉球を訪れた記録としては、沈復の「中山記歴」しかない。この失われた記事文を考察することで、アイデンティティと倫理に縛られていない文学者によって書かれたものらしいことがわかる。

三 本史料の真偽をめぐり

沈復に関する資料は、とても乏しく、この『浮生六記』が、そのすべてらしい。しかし、後二巻（巻五、巻六）の散逸で様々な物語が生じてきた。つまり、この『浮生六記』に関してずっと真偽問

40 ここには、沈復が滞在中に泊まった「留痕室」という場所の存在である。管貽尊（胙）の詩によると、「春云偶住留痕室，夜半涛声听煮茶」という場面があるので、具体的な場所は疑われる。「下真迹一等」の文献学や史料調査などによって使われる手法や判定基準のことである。語源は、王羲之の「蘭亭序」より由来である。唐の時代、歴代の帝王は過去の真蹟を、当時、著名な書道家である歐陽詢、褚遂良などに命じ、「响拓」的な方法で光の透すいいところで白い紙（宣紙）を重ねてから、筆で細目にあがく手法である。それによって出来上がったものは本物と変わらないことで、「下真迹一等」の謂。



題が残っており最近まで様々な展開があった。前述のように、日本では、この本が活字になった数十年後の1938年(昭和十三年)9月、佐藤春夫と松枝茂夫(執筆)で翻訳され、岩波書店によって出版された。ただ、現存の前四記を四記のみで出版したのである。後二記(1935、偽作疑惑)を取り入れなかったことには、慎重な姿勢が見える。だが、1980年代、再版したとき、松枝氏により、題詞一、二、序そして跋も全訳された。特に、題詞一(管貽萼(荜))の六絶句題詞は、確かに沈復の六記ずつを詞で描いた。それより五番の詞で「瀛海曾て乗る漢使の様、中山の風土紀皇華」という詩句から表現され、なおかつ巻五は琉球への旅だった、と世の中の人に理解してもらえた。同時に、散逸しているという事情から、様々な展開を誘発してしまった。

佐藤氏の解説文によると、「浮生」<sup>41</sup>とは、「顧見ればみな夢としか思われぬ生涯のはかなきたのしき、長き悲しみを語らうとするに当って李白が「春夜宴桃李園序」にある「浮生若夢、為歡幾何」から採った語である。「六記」とは、本書がもと次の六巻から成っていたのに相違ない――」

- 巻一 閨房記楽(よきわが妻の記)
- 巻二 閑情記趣(のどか心あわれの記)
- 巻三 坎坷記愁(ままならぬ人の世の記)
- 巻四 浪游記快(草枕おもしろの記)
- 巻五 中山記歴(中山にありし事どもの記)(散逸)
- 巻六 養生記道(世を捨てて道に生くるの記)(散逸)

つまり、『浮生六記』は元来「閨房記楽」「閑情記趣」「坎坷記愁」「浪遊記快」「中山記歴」「養生記道」の六篇より成っていた。ただし、この巻六は、中国の出版物のなか、ところどころ「養生記道」で表記、実のところ「養生記道」の間違いである。ちなみに、今まで流布されている『浮生六記』一部の本のなか、巻六の名称とは、「養生記道」と名付けられているが、これは、多分抄本に筆で書いたので、道と道の混同だと思われる。ある人々は、記道を記道に間違えたのではないのかと指摘する。古文献の専門家にも聞いたが、記道(漢字の字源、徐々になくなることで、文意が通じず、記道(老荘思想の道と謂)は養生の帰着ではないのか、とアドバイスしてくれた<sup>42</sup>。

これなどの六記は六篇各ほど独立した短篇の如くでありながら仔細に見ると自らに首尾応照の妙を極めて緊密に立体的な構成を持っているのは驚くべき用意である。この篇の妙趣の大半は単純化によって複雑な味を生じたこの様式化の機敏に係っているとも言い得るであらう。さうしてこれは中国人、それもさすがに文化の絢爛たる乾隆時代の才人ならではと思わせるものである。平板凡庸な年代順によらないで、この心にくい手法を自叙伝に用いたのは全く独創的な一体として深く推服すべきである。今巻五巻六の失われているのはこの意味で甚だ惜しむべきであらう。<sup>43</sup>

本書はこのような耽美的享樂的で繊細巧緻ではありながら少しも頹廢的でないのも本篇の長所である、と言われている。つまり、封建的、伝統的な中国の日常と反して、18世紀江南地域の市民文化の発展によって知識人の思想的な変化及び言動の活発そして積極的なロマンティックの情調も反映されていることにほかならぬ。というのは、「私室は喜びを覚えており、幸せですが

41 「浮生」という言葉は「人生」を意味し、由来は『莊子・刻意』で「人生は浮かんでいるようなものであり、死ぬまで止めることのようなものになる。」「其生若浮、其死若休。」、李白もその影響を受け、詩に出た。

42 著名な古籍文献大家だった張舜徽の弟子である劉韶軍教授の教示による。

43 佐藤春夫「解説」：『浮生六記』(浮き世のさが) p 185 - 186、岩波書店 昭和13年9月(1938年)。

無差別ではありません。浮き沈みは悲しみを覚えており、悲しみは恨みを覚えていません。」

『浮生六記』前四記の完成は、だいたい清嘉慶十二、十三年（1807—1808）の間だということが分かったが、その後の二記（巻五、巻六）の完成は、不明のままである。少なくとも彼が琉球より帰還してからの嘉慶十三年（1808）後の二、三年だろうと推測する。というのは、この年、沈復は従客として齋鯤らとともに琉球を訪れたのである。このことから、全体の完成は少なくとも帰国後の1809年以後だったと推測できる。

そして完成後もすぐに活字にならなかったため、抄本の形で世のなかに流れまわっていた。数が少ないと、伝承の予期せぬ危険にさらされる。この資料の存在もこの点を示している。この本が活字印刷で広く流通したのは、光緒時代末期の中華民国の変わり目だった。残念ながら、現時点では最初の四記（巻一から四まで）だけが残っており、最後の二記（巻五、巻六）は失われていた。したがって、多事者らは全文として補足したいのだが、見つからない場合は偽造するまで辿り着いた。現在まで、出版されているいわゆる『浮生六記』の全本の最後の二記は偽物である。多分読者にとっては、散逸のままでないことよりは、あった方がよいということだろう。幸いに日本語訳は、後二記の闕のままでも翻訳・出版されていた。

ここまで、沈復はどうして琉球に来たのか、少し話を付け加えたい。蘇州出身の沈復氏は、なぜ琉球に冊封使節団についてきたか？彼を推薦した人がいたのである。それは、石蘊玉という方である。嘉慶十二年頃、石蘊玉氏は、翰林院編修（修撰）に受かったため、上京した。そこで同事になったのは、齋鯤にも居た。そのあと、齋氏は、琉球冊封正使に勤めたとき、石氏より沈復を推薦してくれた。首席秘書（従客）として一緒に琉球への旅に出かけた。それによって『浮生六記』前四記の完成が遂げられた。そのことは、『中山記歴』（海国記）の誘発・登場につながったのである。

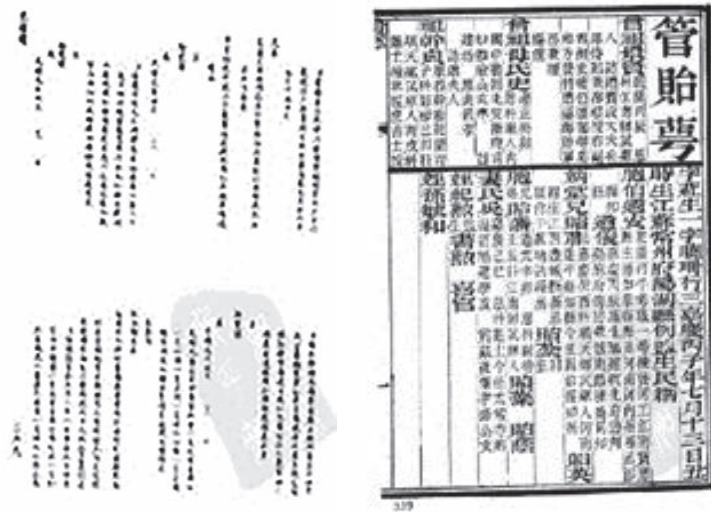


図6 《清代朱卷集成》中有关管貽夢的履历表  
《清代官员履历档案全编》第27册中的有关管貽夢的档案材料

嘉慶十二年(1807)、石蘊玉は北京に行き、沈復も彼の紹介を通して北京に來た。「浮生六記」の第四章の執筆はその年で終わり、これ以上はない。つまり、沈復が同行した齋齊鯤、費錫章の琉球国冊封の旅は、嘉慶十三年の頃だったということ留意しておきたい。その事実は今度の『琉球国記略』又は『続琉球国誌略』にも明記されている。

初めて残本を発見した楊引傳は、沈復の『浮生六記』の写本(残本)を、遅くとも、蘇州の護龍通りにある古い書店で、道光二十九年(1849)に発見した後、光緒三年(1877、王韜氏の跋を書いた)している。ただし、読者に留意してほしいのは、さらに遡って、少なくとも三十年前まで、およそ、道光二十二、二十三年(1842-1843、王韜氏「少時「畏人小筑」にてそれを繰り返し読んだことあり、しかも跋も本の後ろに書いた)、『浮生六記』(全本)はすでに、民間で静かな形で手まわしで流された。これは、王韜氏の少時書いた跋、および(管貽蓀(實に、蔣、人の間違え)<sup>44)</sup>の六絶句題詞によって明らかになるはずである。それによって、「佚した「中山記歴」は、彼が琉球に行ったことを意味することがやっとわかったのである(知所亡《中山紀歴》、蓋曾到琉球也。)(楊引傳序より)。

数年後の道光二十九年(1849)のことである。その時点ですでに六つのうち、二つが欠落していた。しかし、その直後、楊引傳の義弟の王韜(アウトウ)は地元の文献から、誰かが以前にすべての原稿を見たことがあることを知り、その情報を楊引傳に送った。光緒三年(1877年)、楊引傳は友人の励ましで『浮生六記』を自分の『独悟庵叢鈔』に収録し、自ら序文を書き、義弟王韜に後書きを書いてもらった。そのほか、王韜より地方文献から見つかった、『浮生六記』に関連する詩作六首(管貽蓀、潘鐘瑞の題詩を叢書のはじめのページに置く。さらに次年度の『申報館叢書集・紀麗類』の一種として取り入れて出版をした。これは、『浮生六記』(四巻のみ)の最初の刊行本だったのである。そして、光緒三十二年(1906)、『浮生六記』はまた、東呉大学に出版された『雁來紅叢報』に収録され、世間に次第に広がっていった。<sup>45</sup>

いまでは『浮生六記』には、中国語版と海外版がすでに140種以上ある。その中で、最初の「足本」として知られているのは、1935年11月に世界書局に編集・出版された『美化文学名著叢刊』に収録されたものである。このバージョンは、いわゆる最初の『(足本)浮生六記』であり、偽作本その由来が明らかになった。

つまり、光緒年間の終わり頃、江蘇省呉興出身の多事者王均卿は、彼自分の叢書である『香艷叢書』の中に『浮生六記』を収録したため、すでに失われた写本の二記を蘇州内外にも探したが、見つからなかった。残念ながら彼は、やはり完成本を入れたいため、こっそり補足者を探して頼みたいことを持ちながら過ごした。結局、彼の死去する前の年(1934)、突然それは見つかったと、彼に言われた。その後わかったように、それは偽作センセーションの始まりだった。王均卿の死後、『浮生六記』本の後二記(巻五、巻六)が人々によって検証され、それらは真実だと信じられ、

44 この指摘は、最初に俞平伯氏の発見である。約半世紀後、1981年『文匯月刊』(上海)文章を再発表(1981年、俞先生在著名藏書家黃裳處看到管氏《裁物象齋詩鈔》原刻本，見其第三十九題為《長洲沈處士三白以〈浮生六記〉見示，分賦六絶句》，內容與《浮生六記》旧刊上的六絶句一致，但署名為“貽蓀”，而非“貽尊”。核實之後，俞平伯即在當年的上海發表文章，認為“自當以《詩鈔》為正。”同時，他還寫信給黃裳，曰“按《六記》旧本，今刊俱作貽尊，或字誤，或更名未可知，而胙字決不誤。得校正此一字，不啻百朋，亦快事也。”)

45 2017年1月2日『光明日報・文学遺産』第5版に掲載された「浮生六記」の特集記事は、「フルブック」の後二記の著者問題について探った。また、朱文通氏もまた、2017年2月9日付けの同新聞の記事に「フルブック(足本)」である『浮生六記』の著者に関する問題で議論した。いずれも参考になる。

1935年8月に上海にある世界書局という会社は「美化文学名著叢刊」で「浮生六記」の完全版(足本)として出版されたのである。

完全版(足本、全本という)が出版された後、疑問は半世紀以上続いた。その中で、文学的・歴史的伝説の専門家である鄭逸梅氏は、それが偽造であることを証明した。1980年代の初頭、「清娛漫筆」という文章の中、鄭氏が次のように語った。王均卿が亡くなる一年前に、ある日、王均卿氏は、自分に後二記の補足を頼んできた。そして、「養生記道」は どうでもいいが、つまり何気なく書いても大丈夫だと言った、ただ「中山記歴」はある根拠によって書かなければならない、とおっしゃった。自分には、趙文楷の使琉球の日記の参考に提供するが、ぜひお願いしたい、と話をくれた。1992年5月26日、鄭逸梅は「中国旅游報」に王均卿の「白辛簪」<sup>46</sup>という記事を掲載し、「ある日、彼(王均卿)は私が沈三白(沈復)の書き込み(文筆)を模倣して穿鑿できた後、代わりに世界書局に送って出版する、と提案してくれた。」なぜ、そういう風に誘ってくれたか、たぶん、その時、私の執筆センスまたは文学的スタイルは沈三白に何度なく似ていると、当時多くの人から言われていると推察されているのではないのか?つまり、非常に美しく新鮮な雰囲気かセンスか、……ただし、その時の私は、非常に用心深く、そして偽造したくなかったので断った。結局、二冊の偽造本が誰の手によってつくられたのか?鄭逸梅は世界書局中の人々だけかぜったいそれを知っている人がいるはずだと信じている。確かにその後、かつての大東書店の同僚が真実を明らかにした。「浮生六記」の完全版の巻五と巻六は、すべて寒士である黄楚香氏によって制作された。王均卿が黄楚香氏と約束して、王氏より琉球に関する参考資料を提供し、黄氏が執筆する。完成後、二百現大洋の原稿料に同意して支払う予定だった。

しかし、妙なところは、史実に間違いがあることである。嘉慶五年(1800年)、清は琉球国王に冊封を授けるために使節を派遣したが、正使の趙介山はその関連する資料を残さなかったと考えられている。その代わりに副使節の李鼎元は『使琉球記』という名称の日記体資料を書いて残していた。王均卿が黄楚香氏に提供したのはその日記だった。したがって、偽書としての「中山記歴」は、使節人物、年代、冊封対象などの点でまったく違うことなのである。だからこそ、1938年に佐藤春夫らが日本語に翻訳・出版した際、このバージョンは採用されなかったようで、最初の四巻だけが翻訳され、最後の二巻はカタログにはっきりと「散逸」と記された。

今日まで、長年の研究と詮索のことで、学界では一般に、世界書局により出版された足本だった『浮生六記』は最後の二巻(偽作)が偽書と信じられている。王均卿からの偽作オーダー(委託)は、鄭逸梅らへの委託が失敗した後<sup>47</sup>、200円の銀圓で寒士である黄楚香を誘惑して買収し

46 鄭逸梅氏により、先生(王均卿)筑屋蘇州の呉中北寺塔東石塘橋で家を建て、「菟裘」をする。

47 実に、30年代後半、鄭逸梅も『崑報』(蘇州)1933年4月26日原載1933年4月27日1933年5月5日、三回分け『崑報』にも、逸梅氏が崑報に「談《浮生六記》」という話題で上下余三回の発表(逸梅)、足本の話は、王均卿氏より聞いた後、社会的な反応などを記した。半世紀後の1981年、鄭逸梅氏本人が「浮生六記」の「足本」問題について書いたとき、つぎのように指摘しておいた。王均卿氏は鄭逸梅氏に参考文献を提供するが、その原闕の二記の補足(「セカンドノート」)を委託したことがあったと指摘した。だけれども、鄭逸梅氏は丁寧にその要望を拒否した。鄭逸梅氏の思い出は、長い間に誰もが認めてきた。鄭逸梅氏は1980年9月頃、兪平伯氏に手紙を送り、「いま世界書局には、すでに『浮生六記』の足本もあり、この後二記はだれが替わりに代筆したのか、わからない。当時、王均卿は弟に連絡を取り、二つを補足して書くように頼んだ。弟は書き方が下手くそなので、お断りをしたが、謝意をすると同時に婉曲に断わった。いわゆる「足本」までについて語った。また、陳創「足本」『浮生六記』の偽りの真実」と、「ブックハウス(書屋)」、2005年、第1号にもその事実を披露した。

たことで完成した<sup>48</sup>。ただし、黄楚香の生涯と行為については、さらに調査する必要がある。

日本側ではこの歴史資料に対しては、過去世界書局に名著として出版され、後二記は偽物であるという先入観がすでに形成されている。したがって、今回の発見にやや冷たい傍観の姿勢を見せてきた。つまり、新史料として取り扱われなかった。さらに、発見者は釣魚島の問題について誇大宣伝を行い、この情報の理解と利用にも影響を与えた。

この翻訳プロセスの中、この資料の日付にいくつかのあいまいさが存在することがわかった。

今まで浮上してきた、いわゆる『琉球国記略』(『海国記』か)の信憑性に応え、中国本土、台湾、香港などの中華文化圏も改ざんのプロセスを追跡して調べた。順調に進んでいるが、その中でも、陳毓璠教授(2010年亡故)<sup>49</sup>の論考研究は依然として非常に有力である。その結論は次のとおりである。

『浮生六記』(人民出版社)の新しい増訂本には『(冊封)琉球国記略』という資料が収められているが、「冊封」という言葉は筆記者などの便宜のために追加され、『琉球国記略』で名前をまともに変更する必要があるはず

である。それは、嘉慶十三年冊封正使齊鯤と副使の費錫璋の二人名義より皇帝に提出した公式報告書『統琉球国志略』(おそらく特定の作者は沈復)と比較すると、嘉慶十三年の琉球冊封には、三つの重要な日付はすべて間違っており、また、文体の観点からは、沈復の作品ではないことがわかる。本当にその作者はおそらく使団のなか、名前を知らずもう一人の韻律に精通した従客である。彼もこの旅行を個人的に経験したもので、彼が見聞きしたものは、作り上げられたり、模倣されたりすることはないが、特定の歴史のおよび文化的価値があるはずである。<sup>50</sup>



図7

48 1989年9月26日、上海文史館館員であった王瑜孫氏も『團結報』に文章を出した。それは「足本浮生六記の謎」でキャッチャーとプランナーを区別するべき記事で明確に後者の「セカンドブック」の偽造者是他の人であると指摘している。同時大東書店の同僚によると、「フルブック」と「フローティングライフ」の六記に続く「セカンドブック」は、黄楚香という寒士の手によるもので、報酬は200銀円でした。」上記の注記はすべて朱氏の文章に基づいている。

49 陳毓璠、中国社会科学院文学研究所の研究員(教授)でありながら、中国社会科学院の名誉学部員であり、古典小説の有名な研究者でもある。著書『沈三白と彼の浮生六記』などを出版。

50 陳毓璠:「琉球国記略」は沈復の作品ではない」、中国社会科学院文学研究所主編:「文学遺産」、2010年、第6号、p4-8。

筆者はそれをここに次のように要約する。

まず、この『冊封琉球国記略』は不正確だが、後に「冊封」という言葉文字が追加されたので、「琉球国記略」となるはずである。

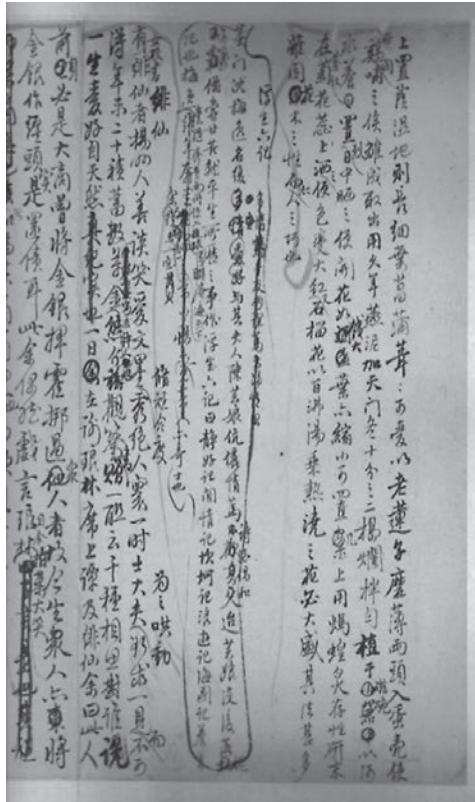


図8

第二、抄録者（銭泳）は、『海国記』という名前を使用しておらず、その名前はテキスト（内文）と一致していない。つまり銭泳氏の抄録文の中、本史料として『冊封琉球国記略』というタイトルを使って、『浮生六記』や『中山記歴』または『海国記』のタイトルをつけなかった。しかし、この抄録文『記事珠』のなか、銭泳氏は『浮生六記』の六記にも言い及んできた。それは、つぎのとおり、「吳門沈梅逸名復、与其夫人陈芸娘伉俪情笃，诗酒倡和<sup>51</sup>。迨芸娘没后，落魄无寥，备尝甘苦，就平生所历之事，作《浮生六记》，曰《静好记》、《闲情记》、《坎坷记》、《浪游记》、《海国记》、《养生记》也。梅逸尝随齐、费两册使入琉球，足迹几遍天下。余与梅逸从未一面。亦奇士也（図8）」<sup>52</sup>。

夫妻は、「郎才女貌」という「仙侶」に詠じられた。とくに妻の芸娘は美貌でもあり文学的な才能もある。沈復に深愛された。「その筆墨の間に纏綿する哀感、ひたすらなる情愛の深さ、特に夫婦の情愛の何というある篤さであろう。作者は滄浪亭畔に居を定め、すこぶる水石林樹の勝

51 夫妻は、まさに劉夔の仙侶のように、芸娘は、女性ながら詩にたくみで、「秋深くして人は痩せ菊花肥ゆ」（秋深人瘦菊花肥）という優れた句を残した。劉夔とその妻樊夫人のことは『神仙伝』に見える。（松枝茂夫訳注より）

52 ここは、明確に沈復の琉球の旅は、嘉慶十三年のことを指している。そして、管貽（萼）葑の六絶句題詞より「瀛海曾て乗る漢使の槎、中山の風土紀皇華」という詩句から、彼は『六記』の全容を直接に見たことがあるらしい。

を擅にした。茶煮え香温まり、花開き月上がるのとき、つねに夫婦相對して酒を酌み交わし、句を探り吟をつらねて、その楽しさは神仙中の人も啻ならなかった。だがそれも束の間、いくばくもなくして、一切はみな夢まぼろしいとなってしまった。これこそこの『六記』がつづられた所以である。」(王韜「跋」より、松枝茂夫訳より)要するに、ここで沈復、『浮生六記』および『海国記』の用語はすでに表れている。だからこそ、このような内証的なことで、論理上には、それは沈復の原稿名前「中山記歴」(または初稿で使われた海国記)ではないようである。

だからこそ、沈復の原稿名前「中山記歴」(または初稿で使われた海国記)ではないようである。

第三、確かに、当時沈復を雇ったのは、冊封正使、翰林院編修の斉鯤である。沈復は、自分の幼少時代の友達である石蘊玉氏は、翰林院編修(修撰)に受かったため、上京して、斉鯤と仲間同士だった。

石蘊玉氏は乾隆帝五十一年(1786)の状元であり、重慶府(知府)と山東省(按察使)の地方長官を務めた後、当時、しばらく翰林院編修の職に就き、斉鯤氏の同僚である。嘉慶十二年、石蘊玉は北京に抜擢され上京に行き、沈復ものちほど彼の紹介を通して北京にきた。これをきっかけに『浮生六記』の第四章までを終わらせた。「海国志」には、嘉慶十三年、沈復の琉球への旅が始まったと書かれていることに気づいた。そのため、斉鯤の琉球へ出張する際、有能な秘書として、沈復は石氏より推薦された。その関係なのか、沈復は同行される五人の従客のなかに首席秘書という優れた地位を占めており、後世の総務長官に相当するため、特別に注目されていたらしい。

今回、斉鯤、費錫璋は琉球への使命から戻った後、『統琉球国志略』という公式報告書に署名して提出したが、実際の執筆者は沈復かもしれない。言い換えれば、『統琉球国志略』が彼の著作である。

これは公式の本であるため、内容は詳細で信頼性が高く、今回の「琉球国記略」と比較することができる。この本は斉鯤費錫璋二人の署名したものが、実際の著者は、斉鯤氏の「司筆硯」を預けていたゲストの沈復である。冊封琉球の旅まえ、沈復は、この数年の間、連続して妻、息子、父を失ってしまい、石蘊玉氏は、彼をケアするため、側室として一人の美貌の女性を紹介してあげた。それは、華萼(字宛如)という名前の女性である。<sup>53</sup>この沈復の妾は「美しくリズムカル」であるだけでなく、武道の腕前もあり、「旅行の際は一緒に行かなければならない」というほどの愛情があり、琉球の旅も連れてまわったそうである。

第四、この『琉球国記略』は、三か所の重要な年代の記録では、『統琉球国志略』の記録とは異なり、特筆に値する。一つ目は嘉慶十三年、冊封使団が琉球に到着した日にち、前者は5月15日、後者は5月17日、という違いがある。二つ目は、前者は「7月元日」で、つまり7月の初日、後者は6月15日の違い。三つ目は当時の琉球王の式典が正式に行われる日のことである。両者も異なり、前者は7月26日で、後者は8月初一の日である。

53 張一民(劍鋒冷然)「新发现记叙沈三白及其姬人华萼的题画诗」の博客より、詩は『清代詩文集彙編』(写真参照)。つまり、新婦人とともに琉球に来たことを、初めて明らかにする。同『彙編』康发祥《小海山房詩集》に《題沈三白福携姬归去图》詩というがあり、小序には、曰：“三白佐使琉球，姬人华萼字宛如，善舞枪击剑，出游必偕，特筑室於吴门，有终焉之志。友人携图徵诗，余惜未谋面，走笔以应。”曾经沧海难为水，尘梦温时不驻春。故黛芸香总消歇，新枝华萼可重芬。翻徵玉筋绸缪共，谁见青衫涕泪频。五柳园中一宵火，栖鸦无处吊斜曛。诗中有注，指明了“华萼女史”即沈三白的姬人。「佐使」という言葉に留意してほしい。意味は互いに助け合うこと。ここに正使の補佐役や調和役としての役割に注意すべき。つまり、沈復氏は、重要な従客としての意味ではないのか、と理解できる。

いずれにせよ、このようなことは、『琉球国記略』の著者が沈復ではなく、他の誰かであることを示している。『琉球国記略』は「海国志」ではなく、『浮生六記』の第五「中山記歴」の最初稿でもないはずである。嘉慶十三年、琉球の旅に同行した従客が少なくとも5人いた。その中で名前が判明しているのは3人である。一人は書道、絵画、篆刻が得意な沈復で、正使斉鯤氏の「司筆硯」である。二人目は、画家でもあり、副使節の費錫章の弟である費錫銘である。もう一人の名前は、黄本中といい、覚庵を号する。彼も書道や細かい筆致の得意な貢生である。彼らはすべて費錫章の『一品集』の中に掲載されている。他の二人だけが記録から欠落している。しかし、この銭泳の『琉球国記略』の抄録から、この作者は特に韻律と音楽理論および劇演技までに精通している人だとわかる。つまり、それは沈復と何の関係もないはずである。

第五、この記録はナレーター個人の自らの体験を記録したものであり、架空や切り貼りの作品ではなく、琉球旅行の活動や当時の琉球の風習を理解するのに役立つことは間違いないと認識される。ある程度の歴史のおよび文化的な価値があるはずである。

以上のように、発見者によって琉球に関する史料は、『浮生六記』の原闕された『中山記歴』の元原稿である『海国記』だと断定されたのは、確かに少し唐突な言動だった。だとすれば、今回の史料は、清の時代のものとして断定ができるはずであるが、『浮生六記』巻五に相当するものではない。陳教授の論考は、このように成立するのは、間違いないだろう。

ただし、少し足りないと感じる。言い換えれば、陳教授のテキスト研究は議論の余地がまだ残っているようである。

第一、この発見により、銭泳の「記事珠」を通じて、嘉慶十三年(1808)に沈復が斉鯤、費錫章について琉球に来たことは、明らかである。

銭泳氏の抄録文について、彼の抄録する仕方に留意してほしい。つまり、全体として必ずしも特定するものより、同じものでも、すきなところか気になるところしか映ってないように感じる。銭泳氏の『記事珠』は、彼の閲覧閲読筆記とは間違いないだろう。だから、披露された影印写真より、原稿を塗抹や変更する痕は結構ある。つまり、読書メモの性格が一目瞭然である。書き方は、概略的であり原文のまま、または原文の必要などところのみを写したか、まったく自由自在な状態が反映されている。時々、原文をそのまま写すことなく、心得の略写のこともある(図8 浮生六記のメモ)。つまり、銭泳氏が抄録する際、一種以上の資料からこの『記事珠』の中に取り入れていたかもしれない。

ただ『琉球国記略』の紙面はほかのページと比べ、やや綺麗に連続的に抄録しているが、でも、原文のまま抄録したわけではなく、自分の理解した上、選んで写している感じも強い。だから、後に追加の文字を入れたり、言葉前後の順を直したり、読みづらい箇所にも字を入れる。ところどころ前後を転倒するところもある。

第二、沈復は、実に道光十三年(1808)、一応前四記(下書き)を完成させ、ある意味で楽に琉球を出たが、そこまで六記ではなく、四記ではないのか、六記まで計画を立てたかどうか疑問点とすべき。だから、『浮生六記』の書名はいつ頃にできたかを問題視するべきである。葉徳均氏はその佚文「再談沈三白」<sup>54</sup>のなか、顧翰の詩「寿吳門沈三白」(「沈三白誕生日への祝い」)より、「昔聞沈東老、家貧樂有余：牀頭千斛酒、架上萬卷書。我觀三白翁、蹤跡母乃是！無必慕榮

54 葉徳均氏の研究より、上世纪40年代发表的两篇研究《浮生六记》的文章：《沈三白与石琢堂》、《再谈沈三白》、《古今》第39期、40期、1944年2月。2005年王人恩、谢志煌「《浮生六记》百年研究述评」のなか、葉氏の研究がみえなかった。



利、不肯傍朝市。當年曾作海外遊，記隨玉冊封琉球，風濤萬里入吟卷，頓悟身世如浮漚。人生得失等毫髮，一意率真非放達。橋邊孺子呼進履，當代大臣來結襪。偶因幣聘來雉皋，十年幕府衣青袍。買山無貲去歸隱，腸繞吳門千百遭。吳閶門，虎阜寺，高道名僧日棲止。朝君結屋相往來，拊掌一笑林花開。贈君以湘江綠筠之杖，醉君以幔亭紫霞之杯；腰纏不羨揚州鶴，歲歲同看鄧尉梅。」次のように指摘した。沈復は、「琉球から帰国後の頃、また嘉慶帝朝の時にあたり、相変わらず生きているそうである。晩年の60歳くらいです。」

第三、三白は44歳ごろ、潼関で姫人である華萼を石蘊玉氏よりいただいた後、道光三年(1823)まで、すでに61歳、康発祥の「題沈三伯福携姫歸去図」の時、すでに17年を過ぎていた。晩年の沈三伯は、如夫人(妾のこと)の華萼に同行し、「吳門に居を筑し、終焉の意を意味するだろう。」、特に、「福携姫歸去」(復が姫を連れて帰隠)という隠語のように表現される。

第四、楊引伝氏が蘇州の露店で『浮生六記』の原稿を見つけたのは、同治三年(1874)前、と最近、陳毓黻氏に断定された道光三十年(1850)前ではないはずである、と筆者は思う。つまり、そのころ、王韜氏が跋文の中に言われた「畏人小屋」で「屢閱」(繰り返し読んだのは)『浮生六記』は、別版のもので、自分の妻の兄である楊氏からもらったものではないはずである。

第五、見つかった六記の手稿は、現在どこに残されたか？誰も知らないであろう。

第六、今回、『(冊封)琉球国記略』通して、沈三白の名前は字復、確認できたこと。

以上をもって、今回の論考としたいが、さらなる問題点を付記しておき、今後、別途に持論を展開したい。

#### 問題1

王韜の畏人小築で読んできた『浮生六記』の稿本は残本か全本か、いまだにわかっていない。そして彼がその際、書いて残した跋を、なぜ、もう一回書いたか、つまり、そのこと自体は、両者の稿本が違うものだ証明しているのではないのか？義兄の楊氏の稿本は、違うものの証明になるのか？さらに、その時見たものは、どういう名前のものか、『浮生六記』の名前か、前四記のみのものか(『浮生六記』の名前はまだないのか)など疑問である。

#### 問題2

楊引傳に発見された『浮生六記』の残本の原本は、今どこに残っているのか、長い間、問題にされなかったのか、問う必要がないのか？

#### 問題3

王韜氏により、管貽萼(葑)題詩が世の中に知られた。それにより、『浮生六記』の存在は、沈復以外の人にも知られるようになった。管貽萼(葑)の六絶句題詞より「瀛海會て乗る漢使の様、中山の風土紀皇華」という詩句から、彼が『六記』の全容を直接に見たことがあるらしい。

#### 問題4

王韜(1828-1897)“屢閱此書”の頃、だいたい道光二十二年から二十三年(1842-1843彼の15歳頃)、そして「少時」の跋を書いた際は、だいたい道光二十九年(1849、時年21歳ぐらい、即道光三十年(一年后的1850年)夏即賦悼亡(妻));楊氏に発見された「残本」の跋を書く頃、約49歳頃に相当する。

王韜氏が読まれた『浮生六記』は残本かどうか、も疑問とし、ただし、「少時」頃を書いてきた跋によると、後二記の内容が全く踏まえていないので、もしかしたら、すでに残本になっているかもしれない。史料が乏しいことで、疑問が存する。

問題5

楊氏見本と王氏見本とは、同じものかもしれない。ただし、前者は残本、後者は全本の区別だろうか。しかも、王氏の書いた跋や管氏の題詞も後二記と一緒に紛失してしまった。または、全く違う抄本かもしれない。

問題6

沈復が事実上の奥さんをつれて、琉球に来たこと。

上述の康氏の詩は三つの絶句で構成されており、その序文には次のように書かれている。

三白は使添いで琉球をでた。姫の華萼、字宛如、彼女は、銃や剣などが得意で、出かける際、必ず携える。そのため、新居を呉門にたてられて、終焉の意を表したい。わたくしは彼に面会したことの無い限り、それに応えて書きおく。

問題7

沈復の没年のことである。少なくとも、道光三年（1823）まで、沈復は生きているらしい。清人康発祥『小梅山房詩集』は編年体で詩を収録している。その「題沈三伯福携姫婦去図」に集められた詩は時系列に並べられており、つまり道光三年（癸未1823）のことであり、嘉慶十三年（戊辰1808）沈三白の琉球の旅に15年も出た。この時こそ、また沈復のために絵を描き、康発祥に詩を書いてもらう要請の人がいたことは、沈復本人が生きていることを示していた。

問題8

管氏の詞「瀛海曾乘汉使槎。中山风土纪皇华；春云偶住留痕室，夜半涛声听煮茶。」より、彼は、『浮生六記』の足本を見たし、琉球に滞在した頃、「留痕室」<sup>55</sup>にてたまに泊まったことと、その時、夜更に煮茶の沸騰する音を聞きながら涛声に伴奏されていた、という妙趣を再現している。しかし、いままで「琉球国記略」では、まったく見られなかったことである。このような具体的な史実は、つまり、場所や背景など、今後、沖縄学術領域の課題になる可能性がある。

問題9

沈復本人は、その後、かなり寵愛する姫人の華萼のことをふまえなかったのは、なぜか？もしかしたら、亡妻陳芸への恩愛や哀愁による遠慮なのか？<sup>56</sup> さらに、乱世を嫌い、彼女を連れて帰して、「鄧尉梅」に終生したのか？

追記

この文章は、最初に金城恵紀氏の助力ではじまったが、未完成のまま十年ぐらい経ちました。今回、沖大図書館の浜川智久仁の助力で完成ができ、また、演劇の訳語は、幸いに学生の又吉風花さんのアドバイスをいただくことができ、心から感謝いたします。

（終了）

55 沈復氏の琉球滞在中、天使館の一室で宿泊をしたことを寸度。

56 「（陳）芸は、中国文学で最もかわいい女性の一人だと思います（芸，我想，是中國文學上一個最可愛的夫人）」（林語堂英語版『浮生六記』序より）。